

高山1・2号遺跡

1992

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

正誤表（高山1・2号遺跡）

頁・行	誤	正
6・3	高山（標高 562m）	高山（標高 564m）
10・27	播磨上1号古墳（内田掛古墳）	播磨上1号古墓（内田掛古墓）
12・25	SK 6・ <u>7</u> は	SK 6・ <u>9</u> は
10頁第5図 SB1実測図		断面図A-A' の左右が逆

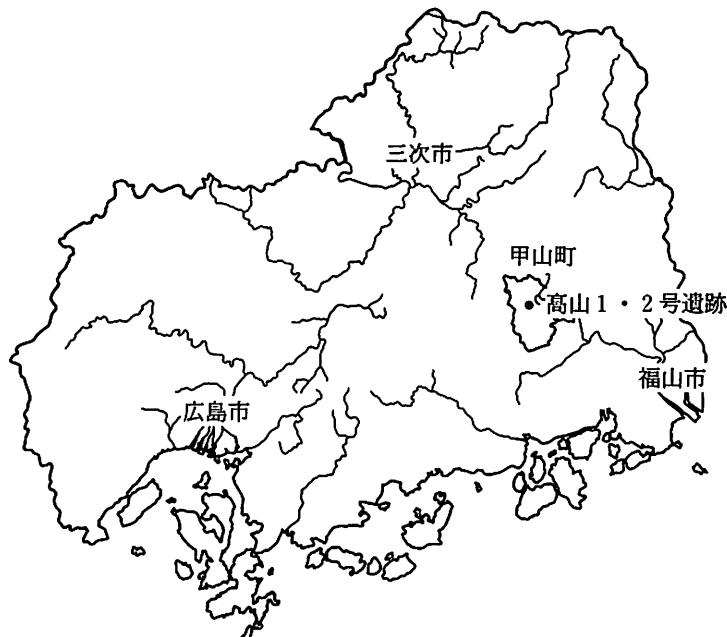
高山1・2号遺跡

1992

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

- 1 本書は、平成2(1990)年度に発掘調査を実施した県営ほ場整備事業(砂田地区)に係る、
世羅郡甲山町大字別迫に所在する高山1・2号遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、広島県教育委員会と広島県尾道農林事務所から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 調査は、伊藤公一・金近忠昭が行った。
- 4 出土遺物の整理・写真撮影等はセンター職員の協力を受け、伊藤が行った。
- 5 本書の執筆は、I～III・IV-1・IV-2-(1)・IV-2-(2)・IV-3・V・VI-1・VI-3を伊藤、IV-2-(3)・VI-2を松井和幸が行い、伊藤が編集した。
- 6 遺構の表示記号は、SB：掘立柱建物跡、SK：土壙・古墓、SX：性格不明遺構である。
- 7 挿図中の方位は第1図を除きすべて磁北である。レベルは海拔標高で示した。
- 8 第1図は、建設省国土地理院発行の1:50,000の地形図(府中)を使用した。
- 9 図版のうち遺物に番号を付していないものは、挿図に掲載していない。
- 10 土器の断面は、縄文土器・弥生土器・土師質土器：白ヌキ、須恵器・須恵質土器：黒ヌリ、磁器：アミ目である。



本文目次

I.	はじめに	1
II.	位置と環境	2
III.	調査の概要	6
IV.	高山1号遺跡	8
1.	遺構	8
2.	遺物	19
3.	墓石	27
V.	高山2号遺跡	28
1.	遺構	28
2.	遺物	34
VI.	まとめ	37
1.	高山1号遺跡の遺構について	37
2.	高山1号遺跡出土の縄文時代晚期の土器について	38
3.	高山2号遺跡の遺構について	39



高山1号遺跡見学会

図版目次

高山1号遺跡

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-------------------|
| 図版1 a | 高山1・2号遺跡遠景（北から） | c | S K 6～8完掘状況（北西から） |
| b | 高山1号遺跡調査前遠景
(北東から) | 図版7 a | S K 9検出状況（北東から） |
| c | 同上近景（南から） | b | 同上断面状況（北西から） |
| 図版2 a | 東1・2区，西1・2区近景
(北から) | c | 同上完掘状況（北西から） |
| b | 西1・2区近景（北東から） | 図版8 a | S K 10検出状況（北西から） |
| c | S B 4完掘状況（北東から） | b | 同上断面状況（北西から） |
| 図版3 a | 古墓群全景（北西から） | c | 同上完掘状況（北西から） |
| b | 古墓群作業風景（北東から） | 図版9 a | S X 1検出状況（北東から） |
| 図版4 a | S K 1・2完掘状況（南東から） | b | 遺物（1～8）出土状況（南東から） |
| b | S K 3断面状況（北西から） | c | 遺物（11）出土状況（南東から） |
| c | S K 3完掘状況（北西から） | 図版10 | 出土遺物I |
| 図版5 a | S K 4完掘状況（南東から） | 図版11 | 出土遺物II |
| b | S K 5検出状況（北西から） | 図版12 | 出土遺物III |
| c | S K 6・7断面状況（北から） | 図版13 | 出土遺物IV |
| 図版6 a | S K 7完掘状況（南西から） | 図版14 | 出土遺物V（東1区出土土器） |
| b | S K 8断面状況（北西から） | 図版15 | 出土遺物VI（東1区出土土器） |
| | | 図版16 | 出土遺物VII（東1区出土土器） |

高山2号遺跡

- | | | | |
|--------|---------------------|--------|-----------------|
| 図版17 a | 高山2号遺跡作業風景
(北から) | c | S K 1完掘状況（南東から） |
| b | 同上（東から） | 図版19 a | S K 2検出状況（南東から） |
| c | 調査区全景（北東から） | b | 木片出土状況（南東から） |
| 図版18 a | S B 1・2完掘状況（東から） | c | 小柄・小銭出土状況（南西から） |
| b | S B 3～5完掘状況（東から） | 図版20 a | 出土遺物 |

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図（1：50,000）	3
第2図 周辺地形図（1：5,000）	4
第3図 遺跡位置図（1：2,000）	7
高山1号遺跡	
第4図 高山1号遺跡遺構配置図（1：400）	9
第5図 S B 1実測図（1：80）	10
第6図 S B 2・3実測図（1：80）	11
第7図 S B 4実測図（1：80）	12
第8図 古墓群配置図（1：100）	13
第9図 S K 1～5実測図（1：30）	14
第10図 S K 6～8実測図（1：30）	15
第11図 S K 9・10実測図（1：30）	17
第12図 S X 1・2実測図（1：80）	18
第13図 出土遺物実測図I（1：3）	21
第14図 出土遺物実測図II（1：3）	23
第15図 出土遺物実測図III（1：3）	25
第16図 出土遺物実測図IV（1：3）	26
第17図 元禄十三年銘墓石実測図（1：8）	27
高山2号遺跡	
第18図 高山2号遺跡遺構配置図（1：200）	29
第19図 S B 1実測図（1：60）	31
第20図 S B 2実測図（1：60）	32
第21図 S B 3～5実測図（1：60）	折込
第22図 S K 1・2実測図（1：30）	33
第23図 出土遺物実測図（1：3）	35
第24図 S K 2出土小柄実測図（1：2）	35
第25図 古錢拓影（1：1）	35

I. はじめに

県営ほ場整備事業(砂田地区)は、平成元(1989)年度から広島県尾道農林事務所・広島中部台地総合開発事務所(以下「尾道農林」という。)を事業者として、世羅郡甲山町大字別迫の砂田地区で事業面積15.5haについて実施している。

この地区における農家1戸あたりの平均水田面積は0.8haであるが、水田1枚あたりの面積は0.3~0.6haと小規模で不整形な水田が多い。また、農道は狭く大部分が未改良で、水路は用排水兼用の土水路が多いなど、以前から営農環境の整備が望まれていた。このため、農家経済の安定と集団営農の確立、農業機械の中・大型化による共同利用と労力の省力化、農地の集団化や高度利用などを目的として、同事業が計画された。

同事業の開始に先立ち、甲山町は昭和61(1986)年6月、広島県教育委員会(以下「県教委」という。)へ事業予定地内の埋蔵文化財の有無及び取扱いについて協議を行った。県教委はこれを受けて分布調査を実施し、要試掘箇所が3か所あったことから、この旨を昭和62(1987)年5月に甲山町へ回答した。その後、県教委は要試掘箇所の試掘を行い、高山1号遺跡(2,900m²)と同2号遺跡(350m²)の確認をしたことから、この旨を昭和63(1988)年11月に甲山町に回答した。

甲山町は事業者である尾道農林にこの旨を協議し、これを受けた尾道農林は県教委と高山1・2号遺跡の取扱いについて協議を行った結果、事業予定地内の現状保存は困難であるとの結論に達したため、事前に発掘調査を行って記録保存をすることとなった。経費は、文化庁長官と農林省構造改善局との覚書「文化財保護法の一部改正に関する覚書」5項に基づき、事業者負担分(80%)を尾道農林が、農家負担分(20%)を県教委が負担することとして、平成2(1990)年2月に尾道農林は事業者負担分について、県教委は農家負担分について財団法人広島県埋蔵文化財調査センター(以下「センター」という。)に発掘調査を依頼し、平成2年度に調査を実施することとなった。

センターでは、同年4月9日~8月3日まで発掘調査を実施した。なお7月21日には甲山町教育委員会との共催で遺跡見学会を開催し、約100名の参加を得た。本書は以上のような経過による発掘調査の成果をまとめたものである。

発掘調査にあたっては県教委の指導を得るとともに、尾道農林、甲山町教育委員会、地権者の大木原房子、黒木尚、小池邦昭、清水ヒサエ、原田周二、原田稔、吉口隆雄の各氏及び地元の方々から多大な御協力を得ることができた。明記して感謝の意を表したい。

II. 位置と環境

高山1号遺跡及び同2号遺跡は、甲山町大字別迫字高山及び北垣内に各々所在する。両遺跡が所在する世羅郡甲山町は、瀬戸内海にそぞぐ芦田川の上流にあたる標高約300～500m前後の吉備高原の一角で、いわゆる世羅台地の東部を占めている。町の中心地は西南部の甲山・西上原で、瀬戸内沿岸部と県北部を結ぶ交通上の要地にあって、江戸時代以来の郡の中心として、また、今高野山(竜華寺)の門前町、石見路(赤名越)の宿場町として発展してきた。北部の丘陵地では大規模な果樹園栽培が盛んであるが、古くから米・茶・経木帽子等の産地として知られている。

両遺跡が所在する別迫は、町の北西部に位置しており、東は青近、南は赤屋、西は世羅郡世羅町、北は甲奴郡甲奴町と境を接している。周囲を標高500m前後(砂田地区の水田面からの比高は100m前後)の山に囲まれ、中央部北寄りを東流する山田川とその支流の砂田川が合流する一帯は平地が開析されている。また、山田川や砂田川に合流する小支流によって小谷が複雑に形成されている。

両遺跡付近は別迫の南端部に位置する砂田谷と呼ばれている水田地帯で、市街地から北方約4kmにある高山(標高564m)の北麓に位置する。この水田地帯の東端を南北に江戸時代の石州街道(現在の県道甲山甲奴上市線)が通り、さらに別迫から北にある男鹿山(標高633.8m)と女鹿山(標高624m)の間を抜けて県道別迫上下線が通っている。また、高山1号遺跡の南側には東西に通称世羅広域農道が通り、高山1号遺跡の東約150mで先述の県道甲山甲奴上市線と交差している。このように両遺跡付近は市街地からやや離れているが、四方に道が通じており交通は便利である。

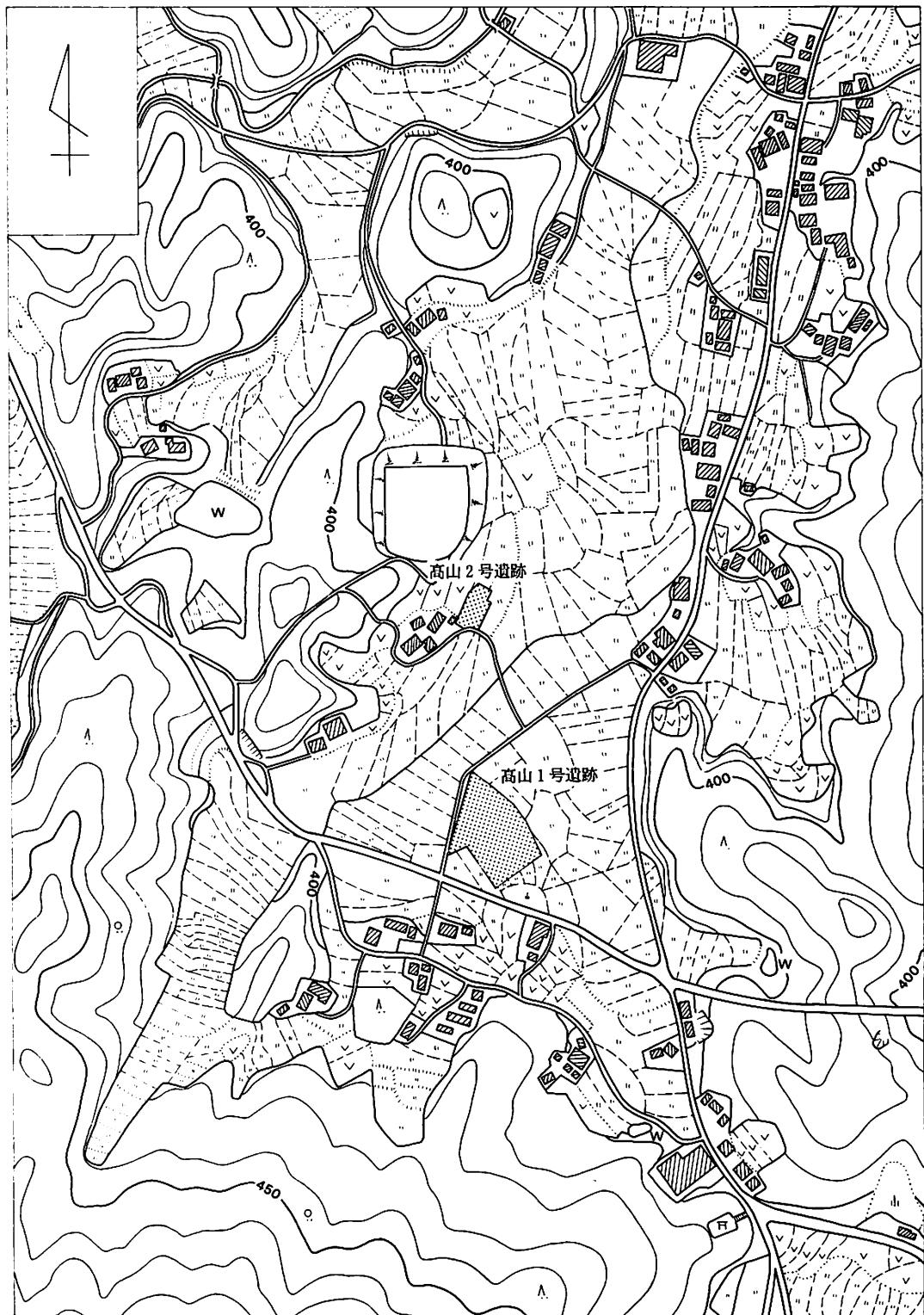
町内の遺跡で最も多いのは古墳であるが、縄文時代や弥生時代の遺跡も知られている。また、別迫に早くから人々が生活を営んでいたことは、高山1号遺跡から縄文時代晩期や弥生時代前期の土器が出土したことや、古墳時代の中草田1号遺跡の竪穴住居跡、後期古墳の塚迫古墳群、辺比古墳群、摺屋古墳などからも知られる。その後の歴史的歩みも、天野能久がいた高山城跡、播磨上1号古墳(内田掛古墳)、播磨上2号古墓、砂田古墓、赤羽道上古墓など鎌倉時代から室町時代の宝筐印塔など多くの石塔群があることからも知られるが、詳細については不明ことが多い。そこで、町内の主な遺跡を加味して、この地域の歴史的状況を概観したい。

縄文時代：前期の遺跡は確認されていないが、中期・後期の遺跡としては、川尻の頓迫



第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

- (■: 城跡 □: 遺跡 ●: 古墳群 ▲: 古墓)
- A 高山1・2号遺跡 1 高山城跡 2 砂田古墳 3 摺屋古墳 4 善行古墳 5 三斗麥古墳群
 6 中草田2号遺跡 7 中草田1号遺跡 8 摺磨上1号古墓 9 津利岩古墳群
 10 実竹城跡 11 ほてくら古墳群 (A・B支群) 12 乙丸古墓 13 蓼池古墳 14 辺比古墳群
 15 潮近古墓 16 長土路古墳群 (A・B支群) 17 净鏡寺跡古墳群 18 塚本古墳群
 19 尾首城跡 20 栗原古墓 21 竜王山古墳群 (A・B支群) 22 石堂山1・2号古墓
 23 灰塚古墳群 24 砂走城跡 25 久代城跡 26 宮城跡 27 新山遺跡 28 茶臼山城跡
 29 宇根城跡 30 大原遺跡 31 金井原遺跡 32 中山古墳 33 円光寺遺跡 34 沼城跡
 35 今高野山城跡 36 大谷古墳群 37 迫谷山遺跡 38 迫谷山古墳群 39 向2号遺跡
 40 比惠谷遺跡



第2図 周辺地形図（1：5,000）アミ目：調査区

遺跡、宇津戸の日暮遺跡・桑ノ木遺跡などから土器や石鏃などが出土しており、別迫の中草田2号遺跡(注の中草田遺跡)からは磨製石斧が出土している。また、晩期の土器がこのたび調査の高山1号遺跡から出土している。いずれの遺跡も小河川沿いの微高地に位置し、背後に低い山がある立地である。

弥生時代：これまで前期の遺跡は確認されていなかったが、このたび調査の高山1・2号遺跡から前期の土器が出土した。中期では川尻の金井原遺跡・比恵谷遺跡、赤屋の新山遺跡、今高野山境内地遺跡、宇津戸の領家遺跡、伊尾の高田遺跡などがある。後期では小世良の迫谷山遺跡、宇津戸の大戸山遺跡・市が原遺跡、伊尾の高田遺跡・本地遺跡、東上原の大原遺跡、西上原の円光寺遺跡など各所で知られ、規模も比較的大きくなっている。

古墳時代：古墳は世羅郡内で700基余が確認されており、県北の三次市に次ぐ密集地として知られ、町内にも数多くの古墳がある。前・中期では別迫の蓮池古墳、西上原の中山古墳、赤屋の灰塚古墳群、伊尾の竜王山古墳群(A・B支群)などがあり、その多くは箱形石棺を内部主体としている。後期では別迫に津利岩古墳群・辺比古墳群・三斗麦古墳群・善行古墳・摺屋古墳などがある。また、小世良の大谷古墳群・迫谷山古墳群、伊尾の塚本古墳群・淨鏡寺跡古墳群・青近のほてくら古墳群(A・B支群)、東上原の長土路古墳群(A～D支群)なども横穴式石室を内部主体としている。なお、別迫の中草田1号遺跡や川尻の日向2号遺跡では竪穴住居跡が見つかっている。

歴史時代：古代の集落跡や遺跡は明らかでないが、別迫は「和名抄」にみえる世羅郡4郷のうち桑原郷に属している。中世になると高野山の管轄のもとに大田荘が経営された。この荘園は、平安時代末期に開発領主の橘氏が桑原・大田両郷を平重衡に寄進したのが始まりで、平重衡は永万2(1166)年、大田荘を後白河院に寄進し、自ら預所職を留保して後白河院を本家とした。院は源・平の争乱後、平家の菩提を弔う名目で文治2(1186)年大田荘を高野山に寄進し、その後、寺家による大田荘の整備が行われ、荘務執行の中心に今高野が置かれた。そして、鎌倉時代～室町時代後期まで寺家方と在地領主(地頭・国人領主)の確執の中で大田荘は高野山領としての命脈を保持していたが、応仁の乱(1467～1477)以降、安芸の毛利氏と備後の山内首藤氏や和知氏などがこの地を知行地化し、高野山領大田荘は崩壊していった。このような状況を反映して多くの遺跡が知られている。城跡には、赤屋の砂走城跡、西上原の沼城跡・茶臼城跡、甲山の今高野山城跡、東上原の久代城跡・宇根城跡、青近の実竹城跡、伊尾の尾首城跡など、古墓には先述の播磨上1号古墓などや青近の瀬近古墓・乙丸古墓、伊尾の石堂山1・2号古墓・桑原古墓、別迫の砂田古墓、西上原の茶臼山古墓などがある。

III. 調査の概要

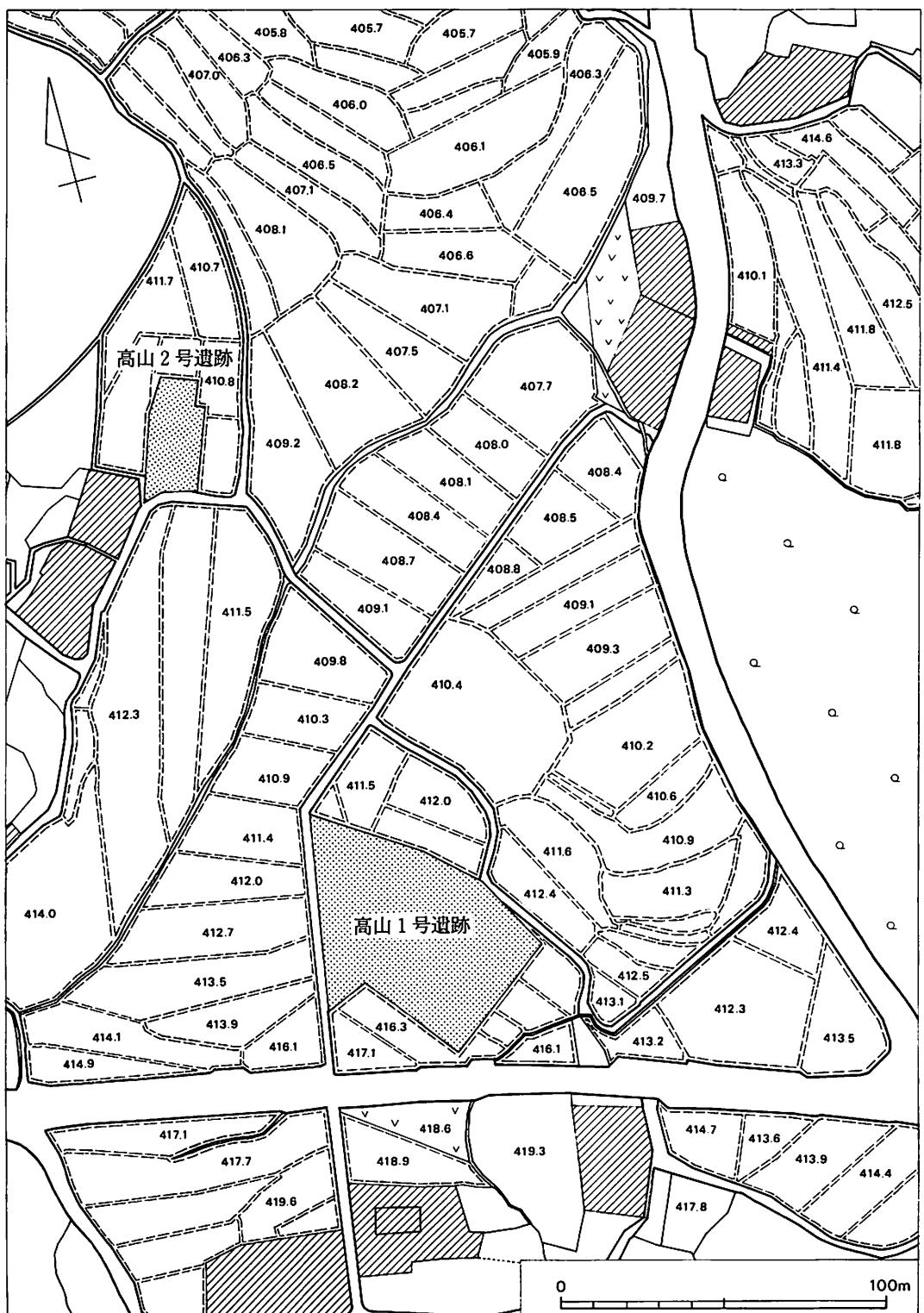
高山1・2号遺跡は、砂田地区の南にある高山(標高562m)の北麓に位置する。北流して砂田川に合流する小河川を挟んで南側に高山1号遺跡があり、その対岸で高山から北にのびる小丘陵の東麓に高山2号遺跡がある。

高山1号遺跡の標高は412~415mで、地形は北に向かって緩やかに傾斜している。調査前の現状は水田であるが、従来からの耕作地の統合により地形が幾らか変わっており、遺構の残存状況も良好とはいえないかった。調査は南側から水田の畦畔を利用して東西に区割りを行い、耕土と床土を重機で除去し、その下の遺物包含層(暗茶褐色粘質土層)から進めた。包含層は、東1区~東4区では20~60cm、他の場所では30~50cmの堆積で、遺構面における比高差は南北でほぼ2mある。

本遺跡からは、掘立柱建物跡4棟(SB1~4)・古墓10基(SK1~10)・性格不明遺構2基(SX1・2)のほか、多数のピットを検出した。遺物は、土師器・須恵器・土師質土器・東播系須恵質土器・中国製の白磁・青磁・瓦質土器・瀬戸焼・亀山焼・唐津焼・伊万里系磁器・古銭などが遺構面直上の暗茶褐色粘質土層から出土した。これらの大部分は混在し大半が小破片である。また、遺構が確認されなかった東1区の東側は、暗茶褐色粘質土層の下に黒褐色の粘質土と砂質土が堆積する谷状地形であるが、この東1区の暗茶褐色粘質土層から0.8m下の黒褐色粘質土層で縄文晩期の土器片が一括出土した。

高山2号遺跡の標高は411~413mで、地形は東にむかって緩やかに傾斜している。調査前の現状は畑であるが、南東~南~南西側は削平されている。調査は耕土と床土を除去し、その下の遺物包含層(暗茶褐色土層)から進めた。包含層は、調査区南西側では10~30cmあるが、北東拡張部の土層は、上層から黒褐色の耕土(約40cm)・茶褐色の床土(10~30cm)・黒褐色の旧耕土(約20cm)・暗黄褐色土(地山)である。

本遺跡からは、掘立柱建物跡5棟(SB1~5)・土壙墓2基(SK1・2)のほか、多数の柱穴を検出した。掘立柱建物跡のうち、SB1・2は調査区の北東側に広がっていたため尾道農林と協議して北東側へ10m拡張した。その結果、新たに古墓を検出した。遺物は、暗茶褐色土層から弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器・東播系須恵質土器・備前焼・唐津焼・伊万里系磁器・古銭などが出土したが混在し大半が小破片であった。また、古墓(SK2)からは、墓壙上面で土師質の杯が出土し、墓壙内には棺の上蓋の一部と考えられる木片があり、その下から小柄と数枚の古銭が出土した。



第3図 遺跡位置図（1：2,000）アミ目：調査区

IV. 高山1号遺跡

1 遺構

(1) 掘立柱建物跡

調査区中央で3棟、調査区北端で1棟の掘立柱建物跡を確認した。掘立柱建物跡は3間×2間が1棟、2間×1間が3棟であるが、重複関係はなく、柱穴から遺物も出土せず、時期決定の目安にできるものはなかった。その他のピットの中には、柱痕があるもの、埋土に土器片を含むものもあったが、建物跡に直接結びつくものはなかった。

S B 1(第5図)

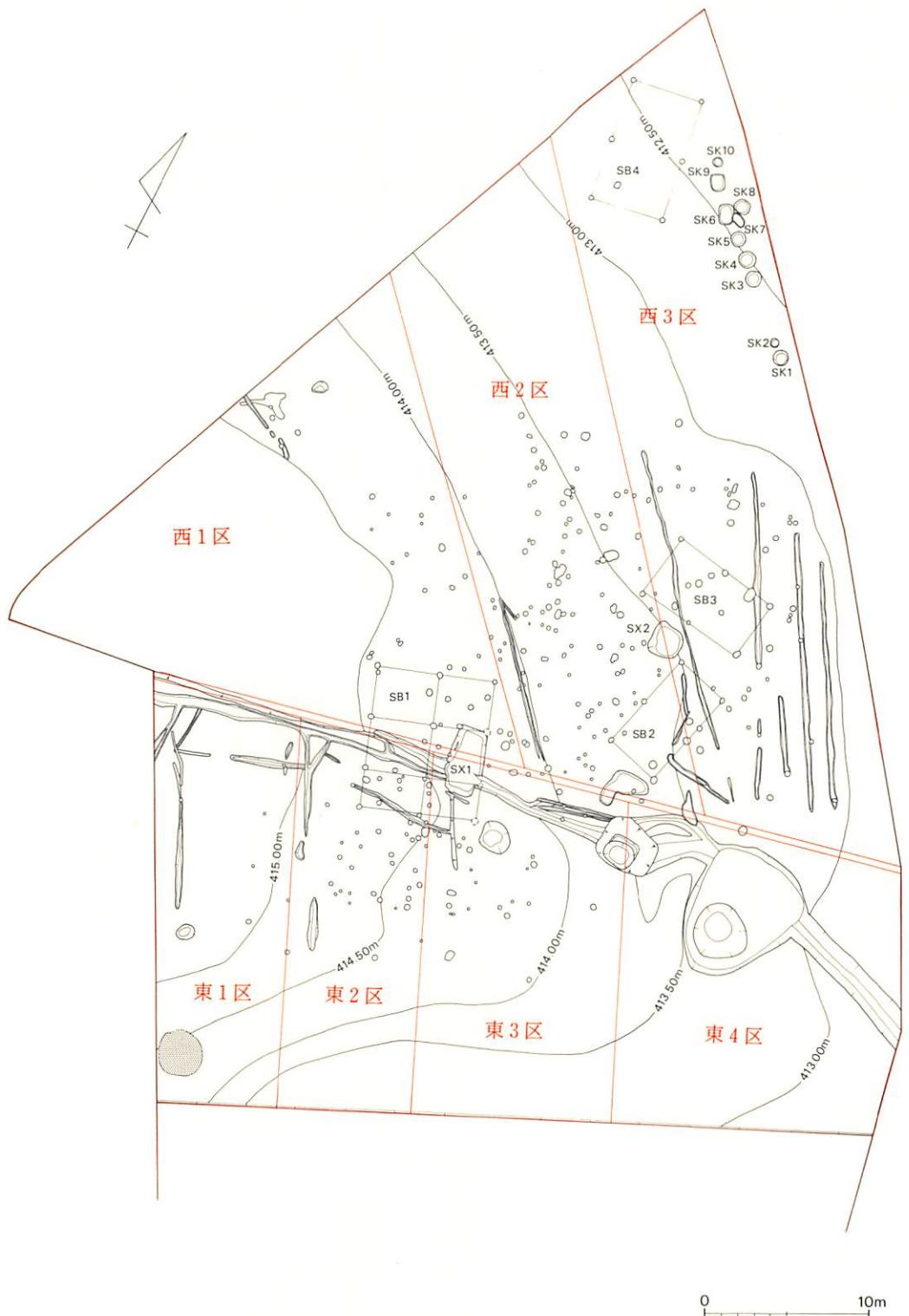
調査区の東1・2区に位置する総柱の建物跡である。規模は桁行3間(約8.6m)×梁行2間(約7.2m)である。桁行の柱間寸法は、P 1～P 4で約3.0m、P 4～P 6で約3.0m、P 6～P 8で約2.4mである。梁行の柱間寸法は、P 1～P 2で約3.8m、P 2～P 3で約3.3mである。桁行はN18°Wである。それぞれの柱穴規模は上面で径30～40cm前後、深さ15～40cm前後である。北東側の柱穴3本は、耕地整理による削平を受けており確認できなかった。柱穴の埋土は暗茶褐色の粘質土である。遺物は出土していない。

S B 2(第6図)

調査区の西3区の東側に位置する建物跡である。規模は桁行2間(約6.3m)×梁行1間(約3.6m)である。桁行の柱間寸法は、P 4～P 5で約3.3m、P 5～P 6で約3.0m、梁行P 3～P 6では約3.6mである。桁行はN15°Eである。それぞれの柱穴規模は上面で径30～50cm前後、深さ15～50cm前後である。柱穴の埋土は暗茶褐色の粘質土である。遺物は出土していない。

S B 3(第6図)

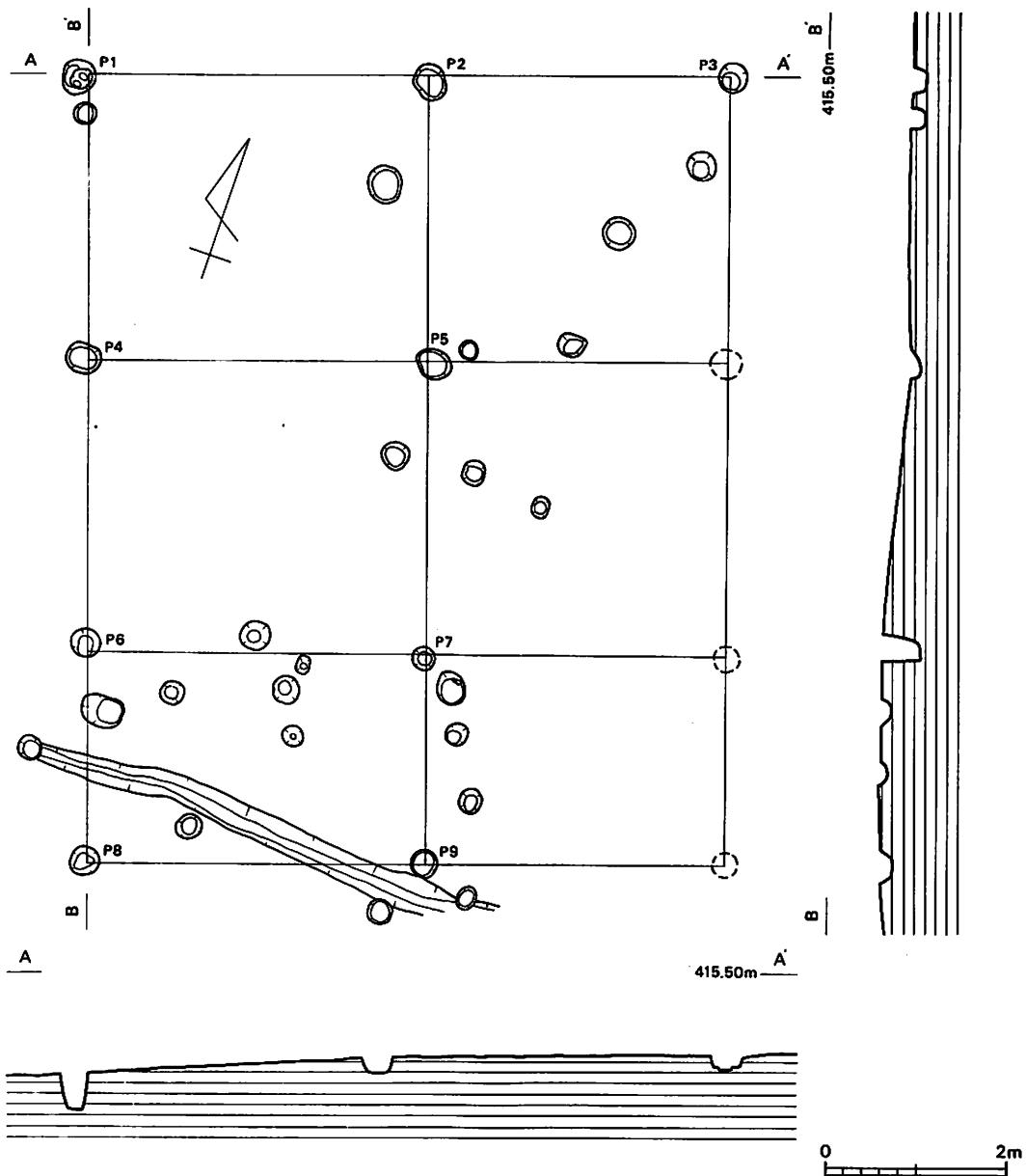
調査区の西3区の東側に位置する建物跡である。東側にS B 2がある。規模は桁行2間(約6.8m)×梁行1間(3.6～4.0m)である。桁行の柱間寸法は、P 4～P 5で約3.3m、P 5～P 6で約3.5m、梁行P 3～P 6は約3.6mである。桁行はN85°Wで、他の掘立柱建物跡とは明らかに違っている。それぞれの柱穴規模は上面で径20～40cm前後、深さ25～55cm前後である。柱穴の埋土は暗茶褐色の粘質土である。遺物は出土していない。



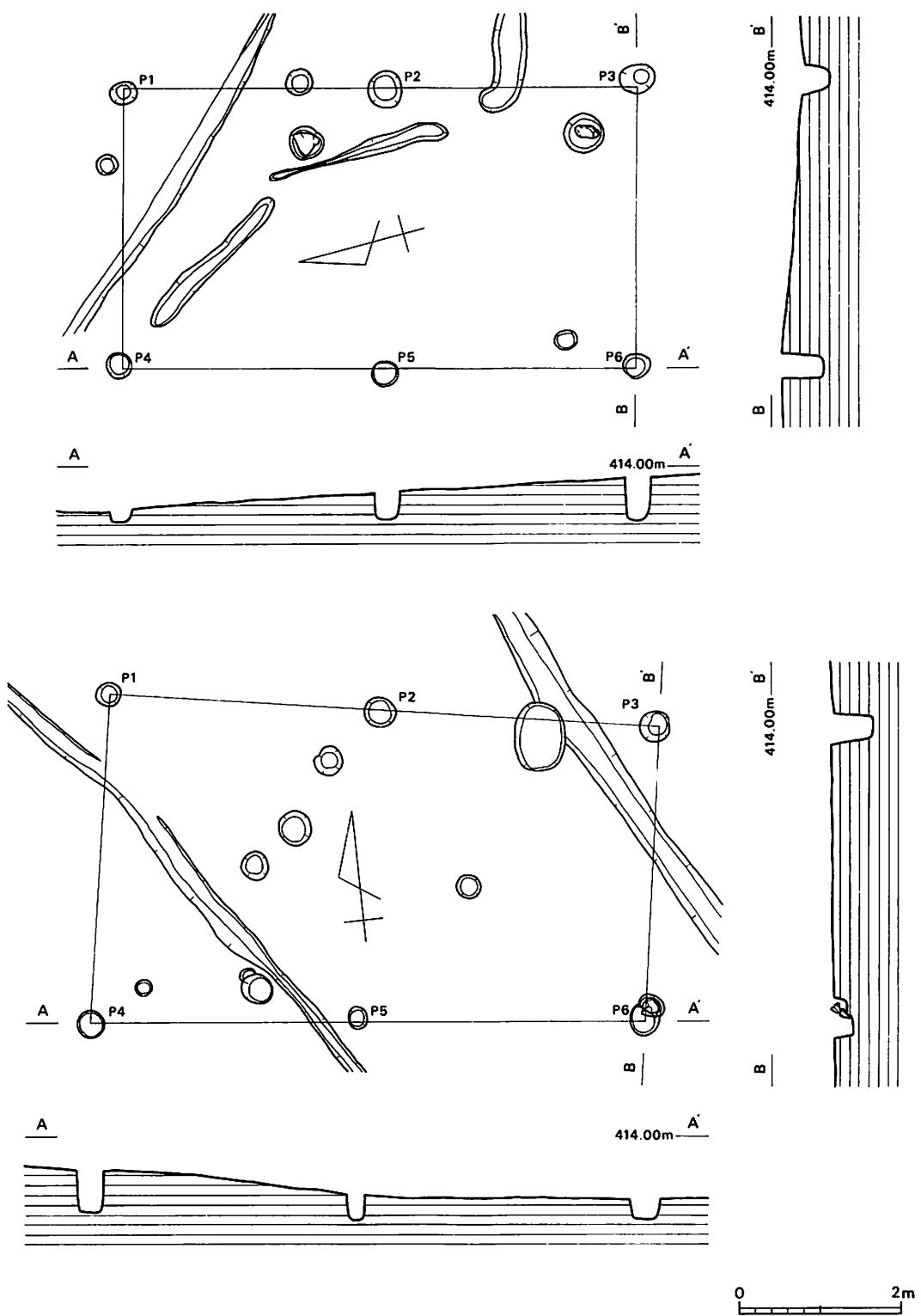
第4図 高山1号遺跡遺構配置図（1：400）

S B 4 (第 7 図, 図版 2)

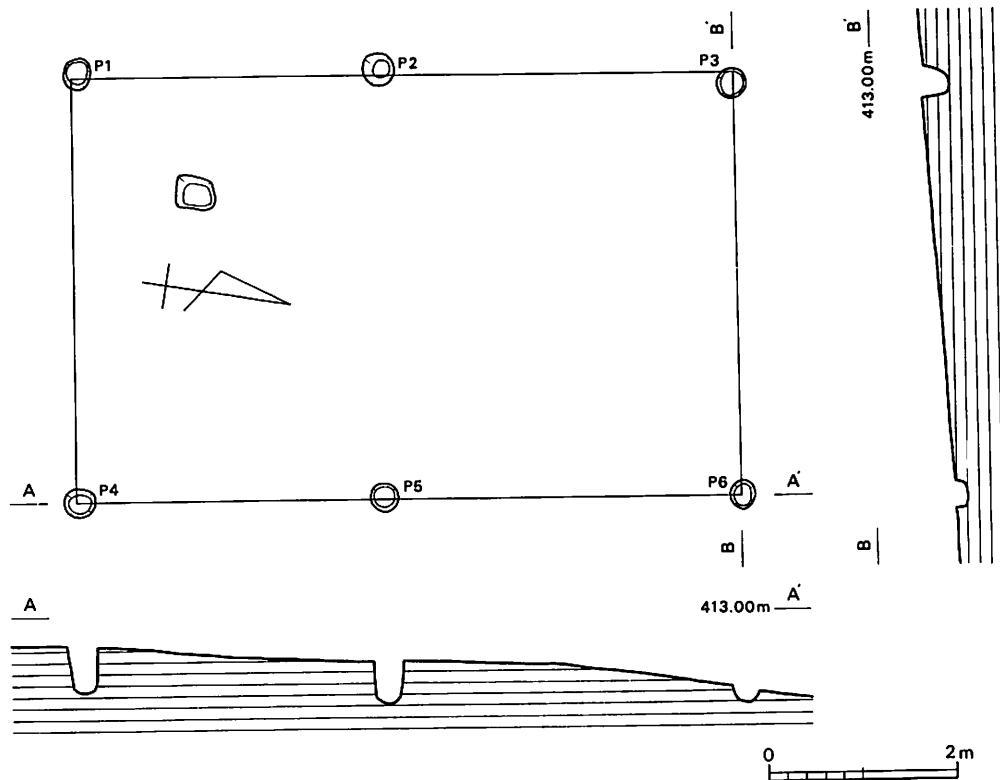
調査区の西 3 区の西端に位置する建物跡である。北側には古墓群がある。規模は桁行 2 間(約7.0m)×梁行 1 間(約4.4m)である。桁行の柱間寸法は, P 4 ~ P 5 で約3.2m, P 5 ~ P 6 で約3.8m, 梁行 P 3 ~ P 6 は約4.4mである。桁行はほぼ磁北である。それぞれの柱穴規模は上面で径25~30cm前後, 深さ15~50cm前後である。柱穴の埋土は暗茶褐色の粘質土である。遺物は出土していない。



第 5 図 S B 1 実測図 (1 : 80)



第6図 SB2・3実測図 (1:80)



第7図 SB 4 実測図 (1 : 80)

(2) 古墓

西3区北端で約13.5mの範囲に直線的に並ぶ古墓10基を検出した。この古墓群の北側は一段下った水田であり、この水田は遺跡の範囲外になっている。従って、この古墓群がある西3区と北側の水田とは土地の利用状況が異なっていたようである。

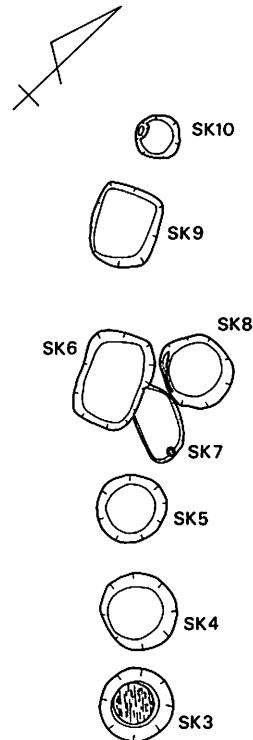
10基のうち南東側の2基(SK 1・2)は、中央部分にあるSK 3と約3.5m離れているが、この間は土壙が存在していない。SK 3～5はほぼ等間隔に並び、平面形や規模もほぼ同じである。また、SK 6・7は隅丸長方形もしくは不整な長方形で、規模も似ており、主軸も同方向である。なお、遺物はSK 7から土師質土器の杯が1点出土した。

SK 1(第9図、図版4)

本古墓は古墓群中の南東端にある。平面形は円形で、規模は径約1.0m、深さ約0.8m、底面の径約0.7mである。底面は平坦で、壁面は垂直に近く掘り込まれている。墓壙内からは人骨その他の遺物は出土していない。埋土は暗黒茶褐色土の単層であった。

SK 2 (第9図, 図版4)

本古墓はSK 1の北西にある。平面形は円形で、規模は径約0.5m, 深さ約0.3m, 底面の径約0.5mで、古墓群中では最小である。底面は中央でやや窪んでおり、橢円形である。壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。埋土は中央部分の黒褐色土(第1層)と南西側の黄黒褐色土(第2層)に分けられるが、第2層は棺桶を固定するのに使用した埋め土の可能性が考えられる。遺物は、土師質土器2片が出土したが、人骨は出土していない。



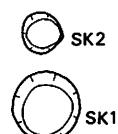
SK 3 (第9図, 図版4)

本古墓はSK 2の北西約3.5mにある。平面形は円形で、規模は径約1.0m, 深さ約0.8m, 底面の径約0.7mである。底面は平坦で、壁面は垂直に近く掘り込まれている。墓壙の中の桶は厚さ約3cmの板材を6枚連結した約0.6mの底板を使用しているが、桶の側板や蓋は遺存していない。また、墓壙内のほぼ中層位に大きな石が落ち込んでおり、この石は墓標石として使用の可能性が考えられる。

埋土のうち黄黒褐色土層(第7層)は、桶を据えたのち周囲を埋めた土である。暗灰黒色粘質土層(第6層)は、桶の側板痕跡と考えられ、底面から高さ約70cmまで確認できた。暗灰黒色砂質土層(第5層)は、桶の内部で堆積した土と考えられ、黄黒褐色土層(第4層)より上層の埋土は、桶の蓋の腐朽によって落ち込んだ土と考えられる。墓壙内からは人骨その他の遺物は出土していない。

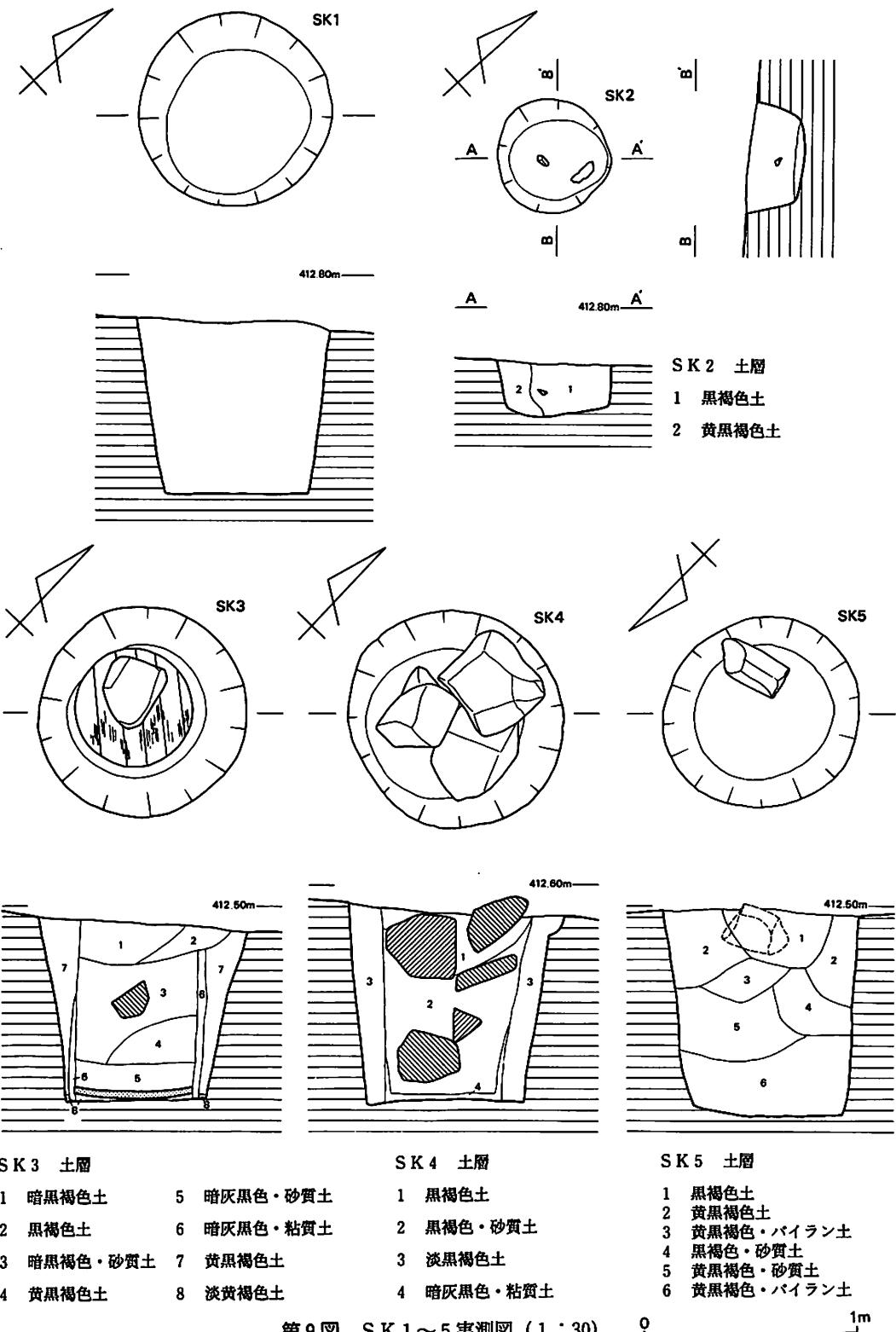
SK 4 (第9図, 図版5)

本古墓はSK 3の北西側にある。平面形は円形で、規模は径約1.0m, 深さ約0.9m, 底面の径約0.7mである。底面は平坦で、壁面は垂直に近く掘り込まれている。桶は遺存していない。墓壙内には大きな石が幾つも落ち込んでおり、いずれの石も蓋を押えていた石や墓標としていた石の可能性が考えられる。

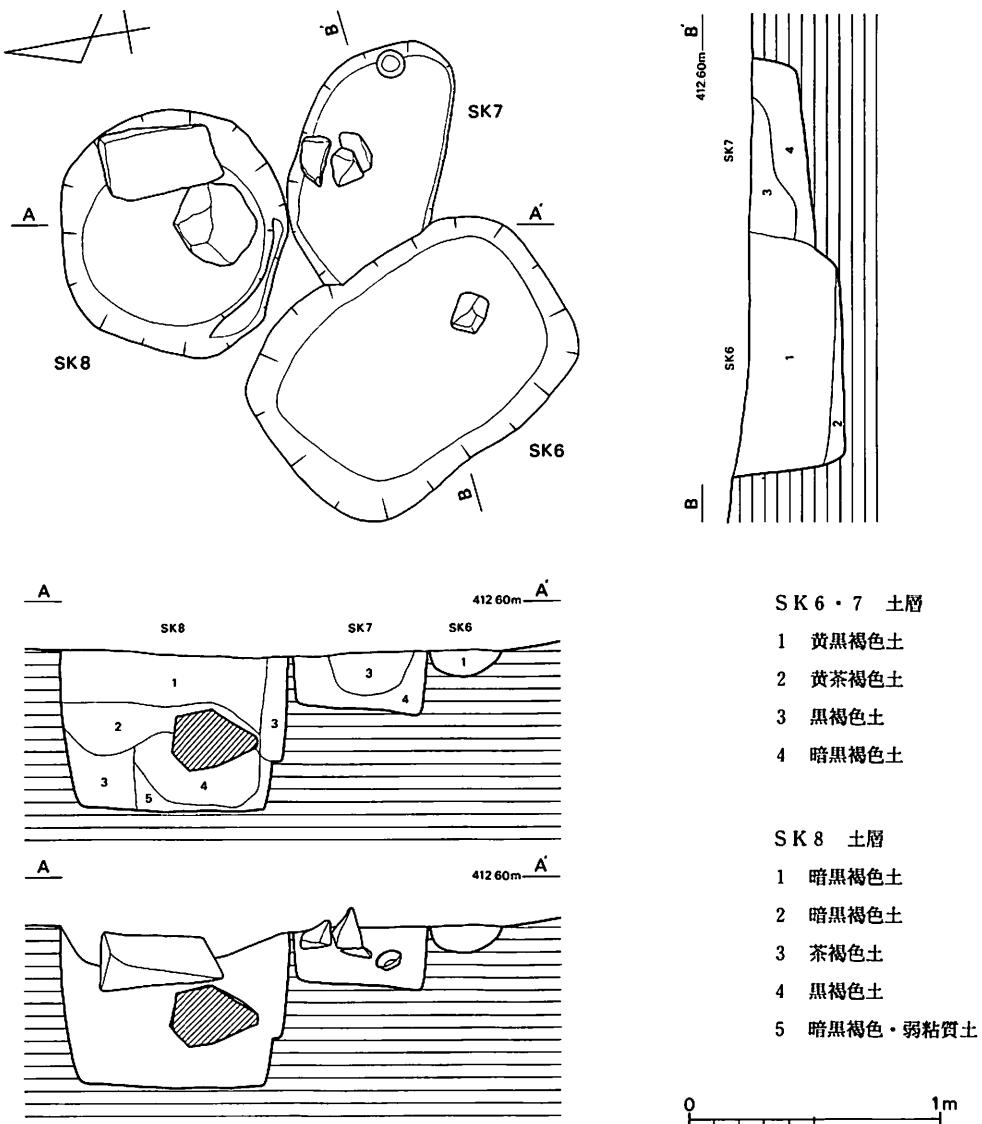


0 2m

第8図 古墓群配置図
(1:100)



埋土のうち暗灰黒色粘質土層(第4層)は、SK3における状態からみて桶の底板と側板の痕跡と考えられる。これによる底板の推定径は約56cmである。側板痕跡は、北東側で底面から高さ約33cm、南西側で高さ約26cmまで確認できた。淡黒褐色土層(第3層)は、桶を据えた後、周りに埋めた土である。黒褐色砂質土層(第2層)・黒褐色土(第1層)は、桶の蓋の腐朽によって落ち込んだ土と考えられる。墓壙内からは人骨その他の遺物は出土していない。



第10図 SK6～8実測図 (1:30)

S K 5 (第9図, 図版5)

本古墓はS K 4の北西側にある。平面形は円形で、規模は径約0.9m, 深さ約1.0m, 底面の径約0.7mである。底面は平坦で北東側へ僅かに上がっている。壁面は垂直に近く掘り込まれている。墓壙内の石は上層にあり墓標石の可能性が考えられる。墓壙内からは人骨その他の遺物は出土していない。

S K 6 (第10図, 図版5)

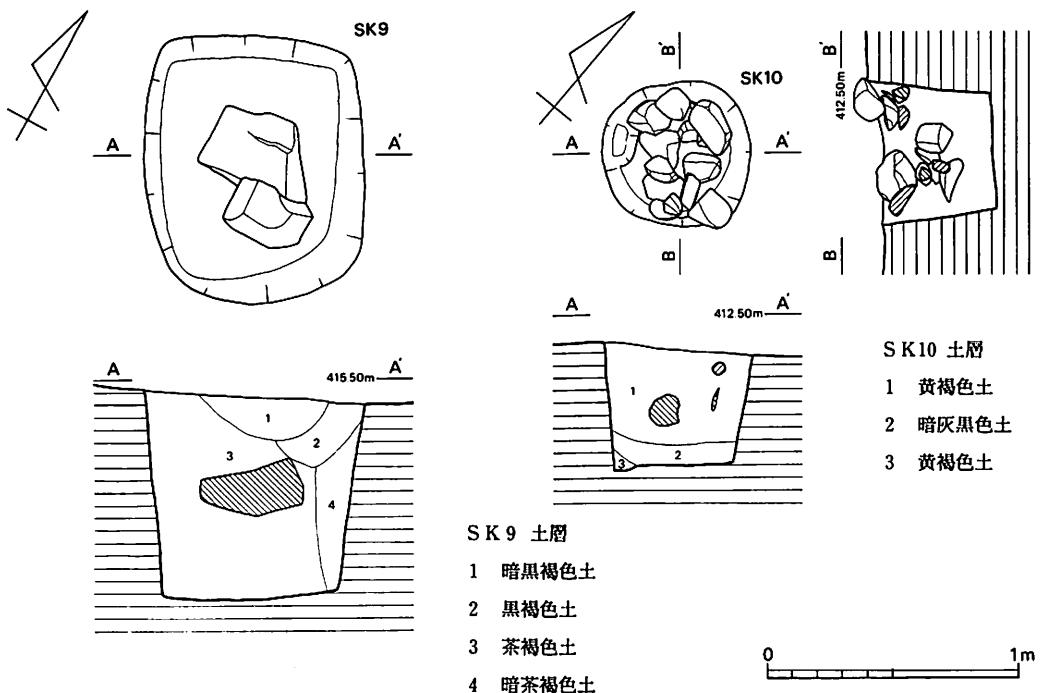
本古墓はS K 5の北西側にある。東辺の一部がS K 7と重複しておりS K 6が新しい。平面形は隅丸方形で、規模は長さ約1.3m, 幅約1.0m, 深さ約0.4mである。底面の長さ約1.2m, 幅約0.7mである。底面は平坦で東側が上がっており、壁面は垂直に近く掘り込まれている。長軸方向はN 153° Eである。墓壙内には20cm大の石が底面から0.34m上にある。この石は墓標石の一部であった可能性がある。墓壙内からは人骨その他の遺物は出土していない。

S K 7 (第10図, 図版6)

本古墓はS K 5の北側にあり、S K 6と西辺隅が重複している。平面形は不整な橢円形で、北辺が弧状になるのに対して、南辺は直線的である。規模は現長で約1.0m, 幅約0.6m, 深さ約0.3mである。底面は平坦で東側に上がっている。壁面は垂直に近く掘り込まれている。長軸方向はN 110° Eである。墓壙内の東辺隅から壁面に接するようにして土師質土器の杯が口縁部を上にして、底面から約10cm上で出土した。また、墓壙内には10~20cmの石が3個ほどあり、いずれも底面から15cm前後上にあった。これらの石は墓標石の一部であった可能性がある。人骨は出土していない。

S K 8 (第10図, 図版6)

本古墓は南側がS K 7に接している。平面形はほぼ円形で、規模は径約1.0m, 深さ約0.6m, 底面の径約0.7mで、中央が僅かに窪んでいる。壁面は垂直に近く掘り込まれているが、南西の壁面には底面から約20cmの高さに最大幅約8cmのテラス面をもつ。墓壙内には、長さ35~45cm, 幅25~30cm, 厚さ20~25cmの角礫が2個あり、下部の角礫は底面から約15cm上の第4層まで落ち込んでいる。これらの角礫は墓標石の一部であった可能性がある。墓壙内からは人骨その他の遺物は出土していない。



第11図 SK9・10実測図 (1:30)

SK9(第11図、図版7)

本古墓はSK6の北側にある。平面形は北辺が直線的で、南・東の両隅が丸くなる不整な方形である。規模は長さ約1.0m、幅約0.9m、深さ約0.8mである。底面は長さ約0.9m、幅約0.7mである。底面はほぼ平坦である。長軸方向はN29°Wである。壁面は垂直に近く掘り込まれている。墓壙の第1層には、長さ約30cm、幅約20cm、厚さ約30cmの角礫があり、第3層には、長さ約40cm、幅約30cm、厚さ約20cmの角礫が落ち込んでいる。これらの角礫は墓標石の可能性がある。墓壙内からは人骨その他の遺物は出土していない。

SK10(第11図、図版8)

本古墓は、SK9の北側に位置し、古墓群の中ではSK2について小規模である。平面形はやや不整な円形で、規模は径約0.6m、深さ約0.5m、底面径約0.5mである。底面は西側壁面に沿って僅かな窪みがあるほかは平坦である。壁面は緩やかな角度で掘り込まれている。墓壙内には15~30cm大の16個の角礫が上面から落ち込んでおり、最下部の角礫は、底面から約10cm上まで落ち込んでいた。これらの角礫は墓標石の可能性がある。墓壙内からは人骨その他の遺物は出土していない。

(3) その他の遺構

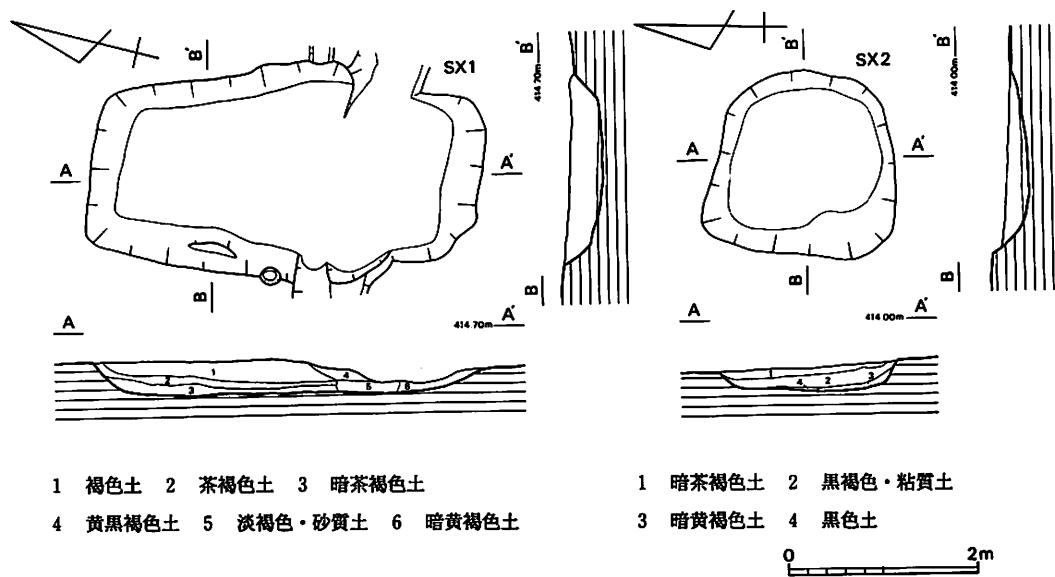
S X 1 (第12図, 図版 9)

調査区の東2区～西1区の間にある。南側は後世の水路によって切られており遺存状況はよくない。S B 1と重複しており、新旧関係は S X 1 によって S B 1 の柱穴が失われており S X 1 が新しい。

S X 1 の平面形は隅丸長方形で、規模は長さ約4.2m, 幅1.8～2.3m, 深さ約0.4mである。底面も隅丸長方形で、長さ約3.4m, 幅1.3～1.8mで中央部付近が最大幅である。底面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がっている。遺物は、第1～3層から土師器・須恵器が出土しているがいずれも小片である。また、拳大の角礫が底面直上にあったが、上面からの落ち込みと考えられる。本遺構の性格は不明である。

S X 2 (第12図)

調査区の西3区に位置し、S B 2・S B 3に挟まれている。平面形は東半が弧状となり南東隅と北東隅が不明瞭で、北西隅と南西隅は隅丸になった不整な方形である。規模は長さ1.9～2.0m, 深さ約0.3mである。底面は東辺から南西隅にかけては弧状となり北西隅は丸く、北辺が直線的な不整な形である。規模は長さ1.5～1.6mである。壁面は底面から緩やかに立ち上がっている。底面は、中央で僅かに窪んでいる。遺物は、第2層から土師器片が出土している。



第12図 S X 1・2 実測図 (1 : 80)

2 遺 物

本遺跡出土の遺物の多くは小破片で、暗茶褐色土層(遺物包含層)から須恵器・土師質土器・陶磁器などが出土した。また、調査区東1区の黒褐色土層から縄文時代晚期の土器が一括出土した。遺構に伴う遺物は、古墓群のSK7から出土した土師質土器の杯のみで、掘立柱建物跡の柱穴からは出土していない。しかし、その周辺の柱穴からは数点の土師質土器がまとまって出土している。

柱穴内出土遺物(第13図、図版10)

(1) 土師質土器(1~11)

1~8は、西2区の同一柱穴内から出土した土師質土器である。1~10はいずれも、体部内外面は回転ナデで調整し、底部は回転糸切りの手法である。11は体部内外面にハケ目調整をし、口縁部には仕上げナデが行われている。

小皿(1~5)

1は口径7.5cm、器高1.1cmで、底部は厚みをおび、体部は直線的に外上方へ短くのびる。口縁端部は丸く終わる。胎土は砂粒を僅かに含む。焼成は良好で、色調は淡黄茶褐色である。2は底部から外上方へ直線的にのび、口縁端部は丸く終わる。胎土は砂粒を僅かに含む。焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。3は底部から外上方へ直線的にのび、口縁端部は僅かに外湾気味になって丸く終わる。胎土は1mm大の砂粒を僅かに含む。焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。4は口径8.4cm、器高2.4cmで、底部から斜め上方に直線的にのび、口縁にかけて薄くなり端部は丸い。5は口径9.0cm、器高2.0cmで、底部から外上方へ直線的にのび、口縁にかけて薄くなり端部は丸く終わる。胎土は砂粒を僅かに含み、焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。

杯(6~10)

6は底部から体部にかけて外上方へ直線的にのび、口縁端部は丸く終わる。胎土は砂粒を僅かに含み、焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。7は底部から体部にかけて外上方へほぼ直線的にのびて、口縁端部は丸く終わる。胎土は砂粒を僅かに含む。焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。8は底部から体部にかけて外上方へほぼ直線的にのび、口縁にかけて僅かに外湾している。口縁端部は丸く終わる。胎土は砂粒を僅かに含む。焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。9は口径11.7cm、器高2.7cmである。体部から端部にかけて厚みをもちほぼ直線的にのびる。口縁端部は丸い。胎土は1~2mmの砂粒を僅かに含む。焼成は良好で、色調は茶褐色である。10は底部から体部にかけて外上方へほぼ直線的にのび、口縁にかけて僅かに外湾する。口縁端部は丸く終わる。胎土は砂粒を僅かに含む。焼成は

良好で、色調は淡灰色である。

浅鉢(11)

体部は頸部からゆるやかにカーブして下に続く。口縁部は外上方に直線的にのび、口縁端部は僅かに肥厚して丸く終わる。

(2) 調査区内出土遺物(12~19)

須恵器(12)

高台付の杯である。底部はほぼ平底で緩やかにカーブして体部に続き、底部端にあたる体部との境に貼り付けの小さい高台がある。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はやや尖る。調整は内外面とも回転ナデ、胎土は砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は淡青灰色である。

土師質土器(13~17)

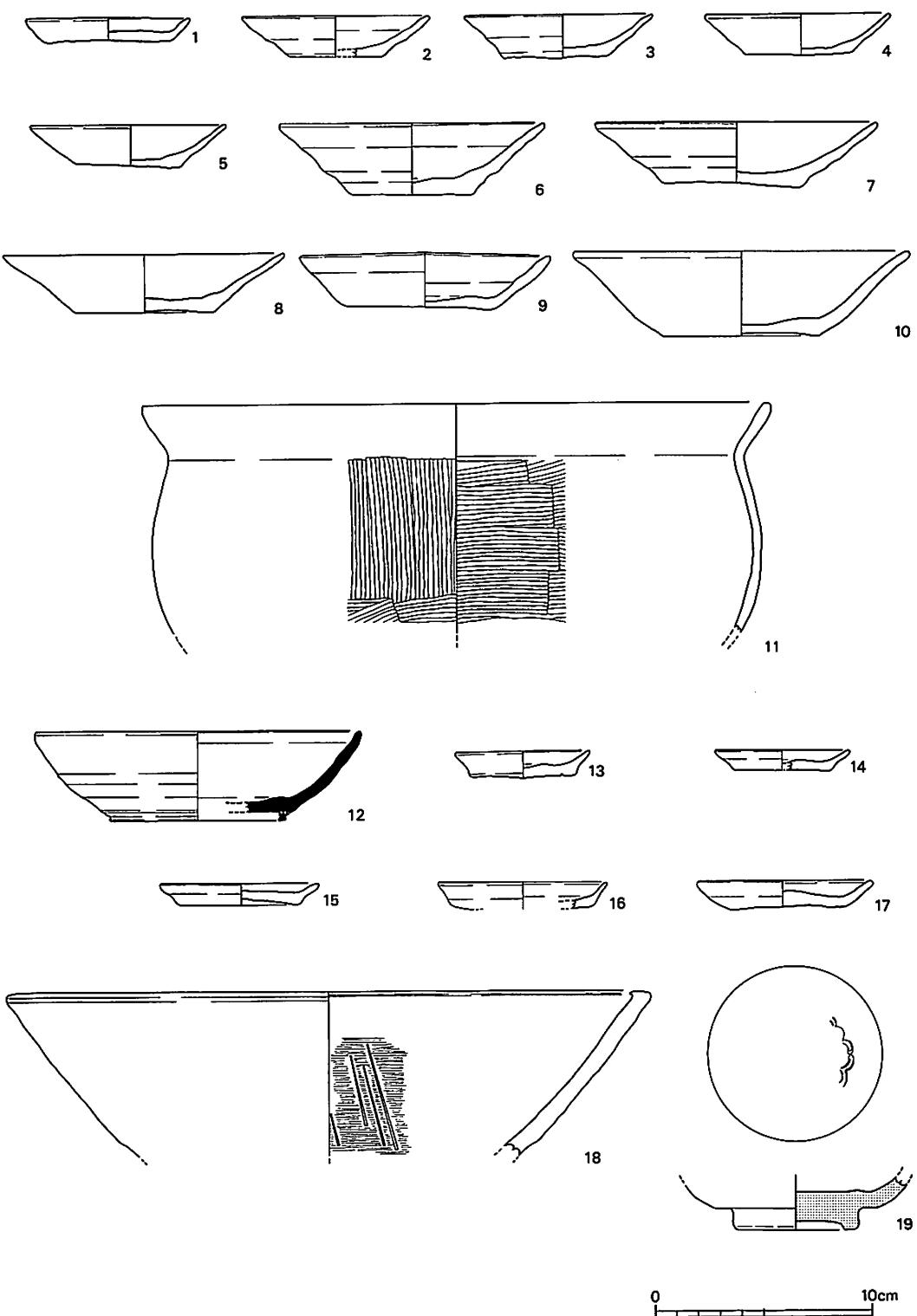
いずれも小皿である。13は底部が肥厚し、体部は直線的に外上方に短くのびる。口縁端部はやや尖り気味に丸く終わる。胎土は1~3mmの砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。14の体部は底部から直線的に外上方に短くのびる。口縁端部はわずかに尖り気味に丸く終わる。胎土は砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。15は口径7.1cm、器高1.0cmで、底部が上げ底氣味である。体部は直線的に外上方へ短くのびる。口縁端部はやや尖り気味に丸く終わる。胎土は砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。16は底部から直線的に斜め上方へ短くのびる。口縁端部はわずかに尖り気味に丸く終わる。胎土は砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。17は復元口径7.8cm、器高1.3cmで、底部から直線的に斜め上方へ短くのびる。底部は肥厚し、上げ底氣味である。体部は直線的に斜め上方へ短くのびる。口縁端部は丸く終わる。胎土は砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は淡茶褐色である。

須恵質土器(18)

擂鉢である。体部は外上方にのび、口縁端部は平坦面となる。擂り目は下から上に刻まれているが単位は不明である。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好で、色調は淡灰褐色である。

磁器(19)

龍泉窯系の碗で、淡緑灰色の釉がかけてあるが、外底部には釉がかかっていないところもあり、胎土が見える。見込みにネコ描きのように見える文様がある。



第13図 出土遺物実測図 I (1 : 3)

(3) 東1区出土土器

東1区は、V字状の谷が南から東に向かって広がる丘陵の傾斜変換線に位置する。この谷の埋土(黒褐色土層)から縄文時代晩期と弥生時代前期の土器が多量に出土した。

縄文土器

壺(第14図1・2, 図版11)

1は推定口径15.5cmの精製の壺口縁部破片である。口縁部が強く逆L字状に外反する器形をしている。胎土は精緻、焼成は堅緻、器面調整は、外面が横方向の磨き、内面が横方向の削りで丁寧である。2は推定口径18.6cmの精製の壺口縁部破片である。口縁部外反度は1ほど強くない。器壁は薄く、胎土は精緻、焼成は堅緻、器面調整は、内外面が横の磨きで丁寧である。

鉢(第14図3~9, 図版11)

3, 4は口縁部が稜をもって弧状に外反する精製の浅鉢である。4は推定口径35.7cmである。くびれ部内面および口唇部内面に沈線を引き、外反度を強調している。いずれも胎土は精緻、焼成は堅緻、器面調整は口縁外部ならびに内面が横ナデ、胴部外面が削りで、丁寧である。

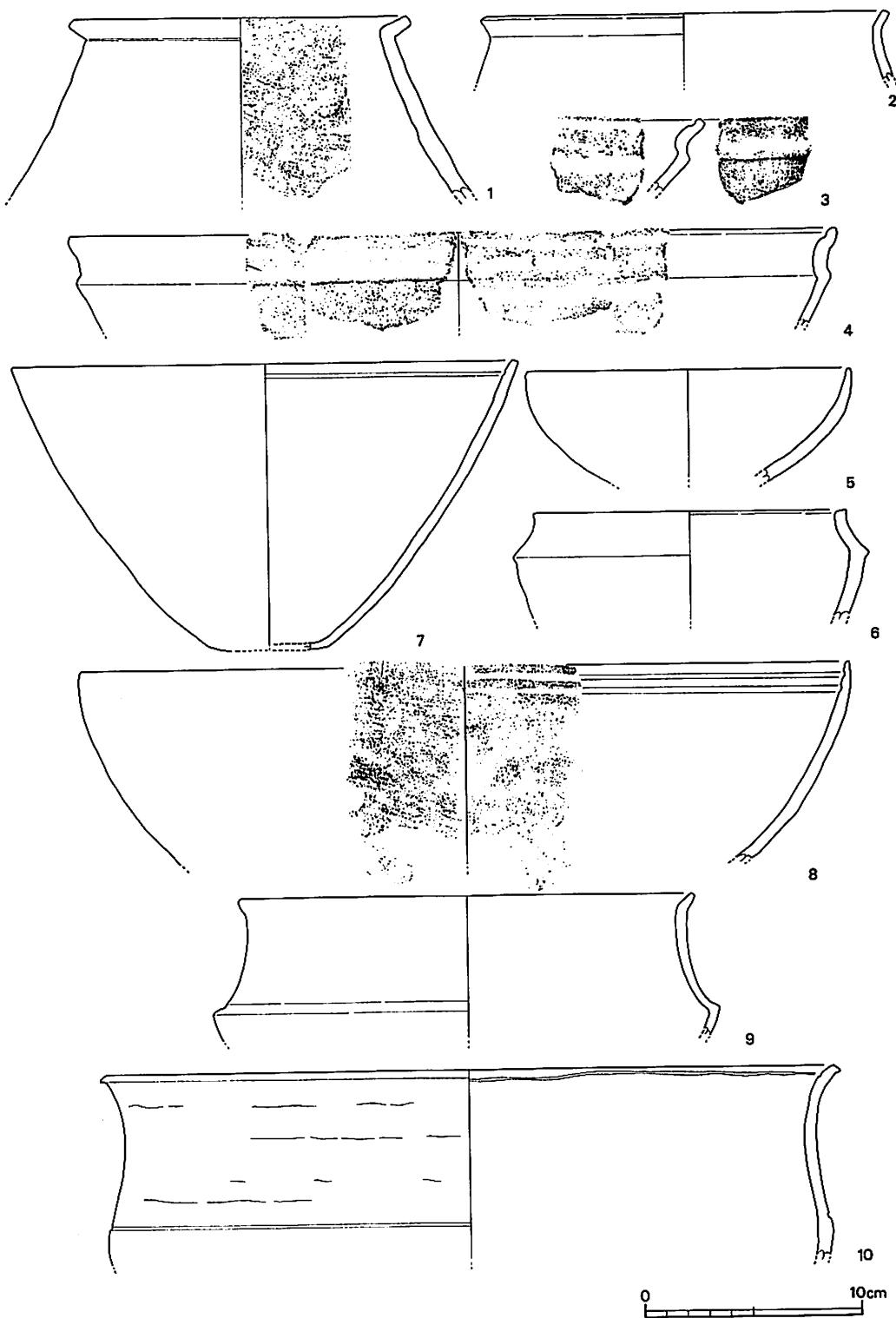
5, 6は高杯の可能性も考えられるが詳細は不明であり、一応鉢(精製)として分類した。5は推定口径14.9cmである。器壁はやや厚いが、内外面とも横方向の丁寧な磨きを施している。6は推定口径14.3cm、胴部最大径16.3cmで、楕円形の胴部に口縁部が逆「く」字状に内側へ折れる器形をしている。屈曲部外面は、下部を抉り、鋭角的な作りとなっている。口唇部は平坦な作りである。胎土は精緻、焼成は堅緻で、器面調整は横方向の丁寧なナデである。

7, 8はやや内湾する胴部を有する精製の鉢である。器外面は無文であるが、口縁部内面には1~2本の沈線を施文している。胎土は精緻、焼成は堅緻で、器面調整は丁寧な磨きで器壁は薄い。

9は推定口径21.2cm、胴部最大径23.5cmで、口縁部が逆「く」字状に内側へ折れる器形の鉢である。屈曲部外面は6とは逆に上面に沈線を一本引き、鋭角的な作りをしている。器壁は薄く、内外面とも非常に丁寧な横方向の磨き調整を施している。

深鉢(第14図10, 第15図1~5, 第16図1~17, 図版11~13)

第14図10、第16図17は精製の深鉢である。第14図10は、推定口径34cm、胴部最大径33cmである。上胴部外面と口縁部内面に一本ずつ沈線を引き、口唇部は平坦に作っている。外面に粘土紐輪積痕が一部見られるが、内外面とも器面調整は丁寧な横ナデである。第16図



第14図 出土遺物実測図 II (1 : 3)

17は口縁外部に刻み目突帯をめぐらせ、口唇部は5mm程度の間隔で丸い棒状工具を押しあて、細かな波状の作りとしている。口縁外部の刻み目突帯は、籠状の工具で、右回りに刻んでいる。頸部外面に沈線を一本引き、くびれを強調している。器面調整は内外面とも横ナデ調整で、非常に丁寧である。

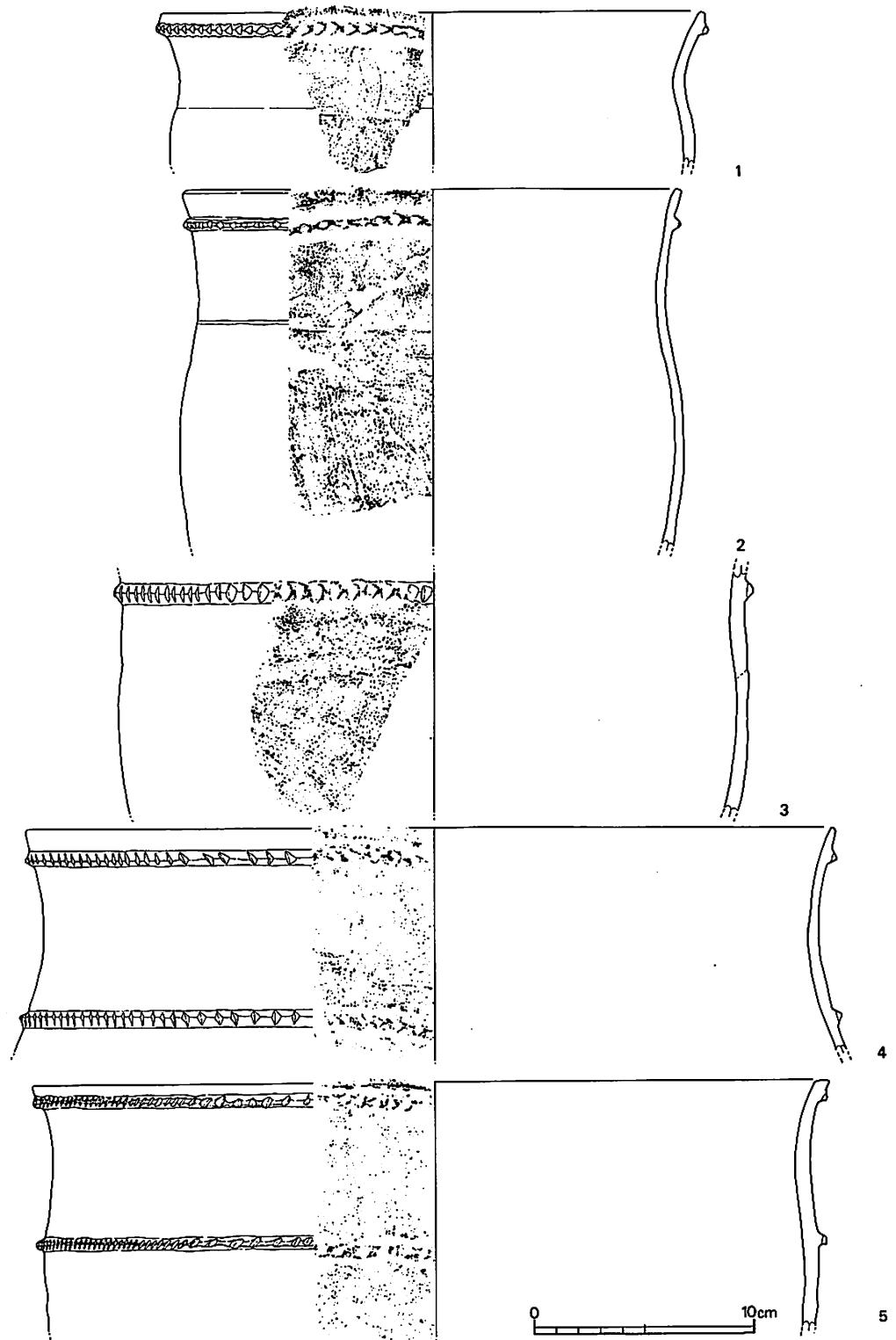
第15図1～5、第16図1～16は粗製の深鉢である。上胴部がややくびれた器形で、口縁部外面および上胴部外面に刻み目突帯を貼り付けている。いずれの土器も胎土は精緻で、器面調整が丁寧なため器表面は滑らかである。出土土器の大部分を占める。

第15図1は推定口径24.5cmで、突帯は口縁部外面に一本貼り付ける。刻み目は籠状工具により右回りに付けている。器面調整は内面および口縁部外面が横ナデ、胴部が横の削りで、上胴部外面の器面調整の異なる部分が段状になっている。第15図2は推定口径22.7cm、胴部最大径22.9cmで1とほぼ同じ大きさである。口縁外部の突帯は丸い棒状の工具を押しつけ、刻み目を付けている。器面調整は内面および口縁部外面が横ナデ、胴部が横および縦方向の削りで、器面調整の異なる部位に浅い沈線状の線を一本引いている。土器の特徴から第16図23の底部が本土器の底部の可能性がある。この底部で土器の全体を復元すれば器高は28cm程度となる。第15図3は推定胴部径28.4cmの深鉢胴部片である。胴部の張りはあまり強くない器形である。突帯は籠状工具により右回りに刻み目を付けている。器面調整は内面が横ナデ、外面は突帯下が横、下胴部は左上がりの削りである。第15図4、5はそれぞれ推定口径36.9cm、36.3cmの大型土器である。両者とも口縁外部と上胴部外面にそれぞれ突帯を有する。4は籠状工具による刻み目で左回りに、しかも口縁外部は下から上へ刻んでいる。5は丸い棒状の工具を押しつけ、刻み目を付けている。器面調整は、内面および上胴部突帯より上が横方向のナデ、胴部以下が横方向の削りである。

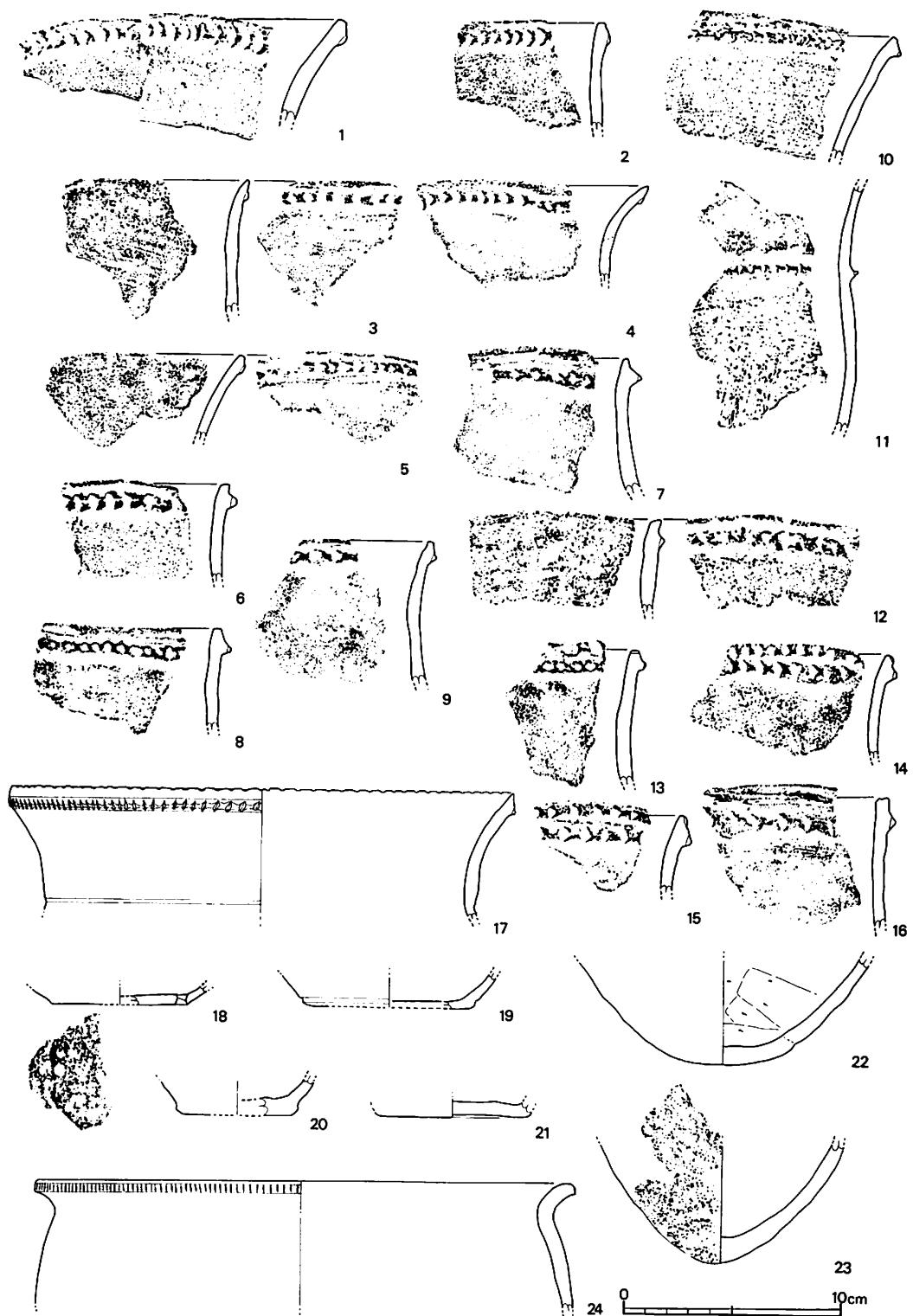
第16図1～16は粗製深鉢土器の口縁部小破片である。籠先による刻み目突帯は1～6、10～12、15、16、丸い棒状工具の押しつけによる突帯は7～9、13、14である。籠先による刻み目は大部分左回りに刻んでいるが、5のみ右回りに刻んでいる。13～15は口唇部にも刻み目をつけ、16は口唇部に凹線状の凹みを付けている。刻み目、胎土、色調などから10、11は同一個体の可能性がある。器面調整は、内面が横方向のナデ、外面は2、5、6、10が条痕で他は横ナデである。上胴部突帯以下は、11に見られるように縦方向の削りなし条痕と考えられる。

底部(第16図18～23、図版14)

18、19、21は精製土器底部片である。いずれも平底で、非常に薄い。器面調整は、内面がナデ、外面は削りなしナデである。出土している精製土器が壺ないし鉢に限られる点



第15図 出土遺物実測図 III (1 : 3)



第16図 出土遺物実測図 IV (1:3)

でこうした器形の底部と推定される。20は小片で詳細は不明であるが、同様な器形の底部であろう。18は全体の個数は不明であるが、底部隅に両面穿孔の穴が開けられている。

22, 23は粗製土器底部片である。23は先述のように第15図2の底部の可能性が強い。22も粗製深鉢の底部と考えられる。

このように精製の壺、鉢の底部は平底で、粗製深鉢の底部はいずれも尖底ないし丸底であった可能性が高い。

弥生土器

甕(第16図24, 図版14)

推定口径25.3cmの甕口縁部片である。胴部がやや張り出す器形になるとを考えられる。口縁部はかなり強く外反し、口唇部に細かな刻み目がつく。器表面は摩耗しており、器面調整等は不明瞭である。

古銭

2枚の断片が暗茶褐色粘質土層から出土している。推定となるが「元祐通宝」(1086年初鑄)と「寛永通宝」(1636年初鑄)の可能性がある。

3 墓 石

現位置は不明であるが、高さは63cmで、幅は基底部で約40cm、基底部から2cm上で43cmで、最大幅は中程にあり約44cmである。正面の壁は基底部に対してほぼ直角に仕上げている。奥行は基底部で13cm、基底部から上方約10cmの部分で約18cm、基底部から上方約30cmの部分で約18cmあり、奥行の最長は基底部から上方約40cmのところにあり約21cmである。なお頂部から下方約10cmでは約19cmで、背後の断面は弓状に仕上げており、石質は花崗岩製である。

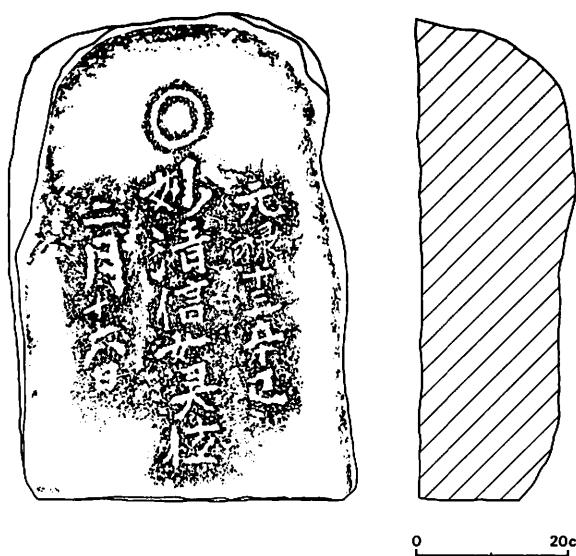
上方に 円相,

右側に 元禄十三辛巳,

中央に 妙清信女(靈)位,

左側に 二月十六日

とあるが、元禄13(1700)年は干支では庚辰で、辛巳は同14年になるためどちらかが間違いであろう。



第17図 元禄十三年銘墓石実測図 (1:8)

V. 高山2号遺跡

1 遺構

(1) 掘立柱建物跡

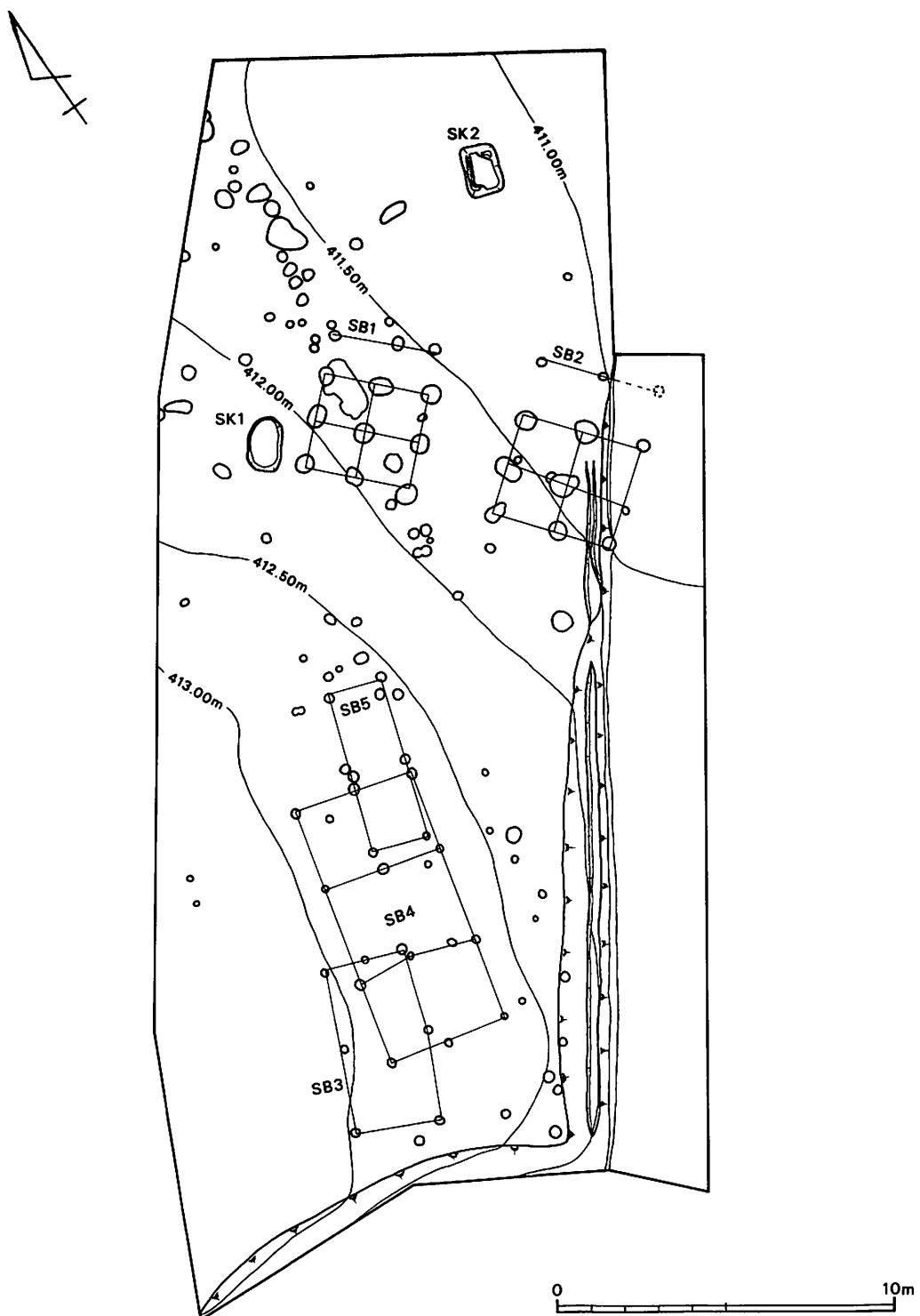
本遺跡からは、調査区北東部で2棟の総柱の建物跡を、調査区中央で3棟の建物跡を検出した。総柱建物の柱穴から須恵器片が出土し、柱痕の確認ができた。なお、3棟の建物跡は柱穴の切り合い関係はない。

S B 1 (第19図、図版18)

調査区の北東部に位置する総柱建物跡である。規模は、桁行2間(約3.0m)×梁行2間(約3.2m)で、梁行方向はN41°Wである。柱間距離は、桁行のP1～P4が約1.5m、P4～P7が約1.6mである。桁行のP7～P8が約1.5m、P8～P9が約1.5mである。柱穴の規模は、いずれも上面の径が0.5～0.7m、深さ0.3～0.5mである。各柱穴からは、黒褐色土の柱痕が確認できた。柱痕の径は約0.2mである。北東側の梁行方向には、規模が上面の径約0.3m、深さ約0.2mの柱穴がある。柱間距離は約1.0～2.0mである。これらの柱穴は、塀又は庇が考えられるほか、1間幅で北東側に規模が拡大する可能性もある。遺物は柱穴の埋土から須恵器片が数点出土している。これらの須恵器片はSK Iから出土した須恵器片と接合した。

S B 2 (第20図、図版18)

S B 2 の東側約2.5mに位置する総柱建物跡である。規模は、桁行2間(約3.6m)×梁行2間(約3.0m)で、桁行方向はN42°Wである。柱間距離は、桁行のP1～P4が約2m、P4～P7が約1.6mである。梁行のP1～P2が約1.6m、P2～P3が約1.4mである。柱穴の規模は、いずれも上面の径が0.4～0.7m、深さ0.3～0.5mである。各柱穴からは、黒褐色(第3層に統一)の柱痕が確認できた。柱痕の径は0.2～0.3mである。北東側の梁行方向には、規模が上面の径約0.3m、深さ約0.2mの柱穴がある。柱間距離は約2.0mと推定約1.8mである。これらの柱穴は、塀又は庇が考えられるほか、1間幅で建物の規模が拡大する可能性もある。また、南東側の柱穴(P8.9)は、農地の改変によって段差が生じており、ほとんどが削平されていた。



第18図 高山2号遺跡遺構配置図（1：200）

S B 3 (第21図, 図版18)

調査区は北東側に向かって緩やかに傾斜しているものの、ほぼ平坦な面に位置する建物跡である。規模は、桁行2間(約5.0m)×梁行1間(約3.0m)で、桁行方向はN24°Eである。柱間距離は、桁行のP4～P5が約2.6m, P5～P6が約2.5mである。梁行のP3～P6が約2.6mである。柱穴の規模は、いずれも上面の径が0.2～0.3m, 深さ0.1～0.3mである。柱穴の埋土は、暗茶褐色土である。柱痕は確認されなかった。遺物は出土していない。S B 4との新旧関係は不明である。

S B 4 (第21図, 図版18)

調査区の南半に位置する。規模は、桁行3間(約7.7m)×梁行2間(約3.7m)で、桁行方向はN14°Eである。柱間距離は、桁行のP9～P10が約2.5m, P10～P11が約3.0m, P11～P12が約2.3mである。梁行のP4～P8が約1.8m, P8～P12が約1.8mである。柱穴の規模は、いずれも上面の径が0.2～0.3m, 深さ0.1～0.4mである。柱穴の埋土は、暗茶褐色土である。柱痕は確認されなかった。遺物は出土していない。S B 3・S B 5と重複しているが新旧関係は不明である。

S B 5 (第21図, 図版18)

調査区のほぼ中央に位置する。規模は、桁行2間(約4.8m)×梁行1間(約1.6m)で、桁行方向はN18°Eである。柱間距離は、桁行のP4～P5が約2.3m, P5～P6が約2.5mである。梁行のP3～P6が約1.6mである。柱穴の規模は、いずれも上面の径が0.2～0.4m, 深さ0.1～0.3mである。柱穴の埋土は、暗茶褐色土である。柱痕は確認されなかった。遺物は出土していない。S B 4との新旧関係は不明である。

(2) 古墓

本遺跡からは、地山平坦面から緩やかに傾斜しはじめた位置でS K 1を検出し、北東側に寄った地山平坦面でS K 2を検出した。遺物は、S K 1の埋土から須恵器片が出土したが、この須恵器片は、S B 1の柱穴から出土したものと接合した。また、S K 2の埋土からは土師質土器の杯がほぼ完形で出土し、底面直上から小柄と古錢が出土した。

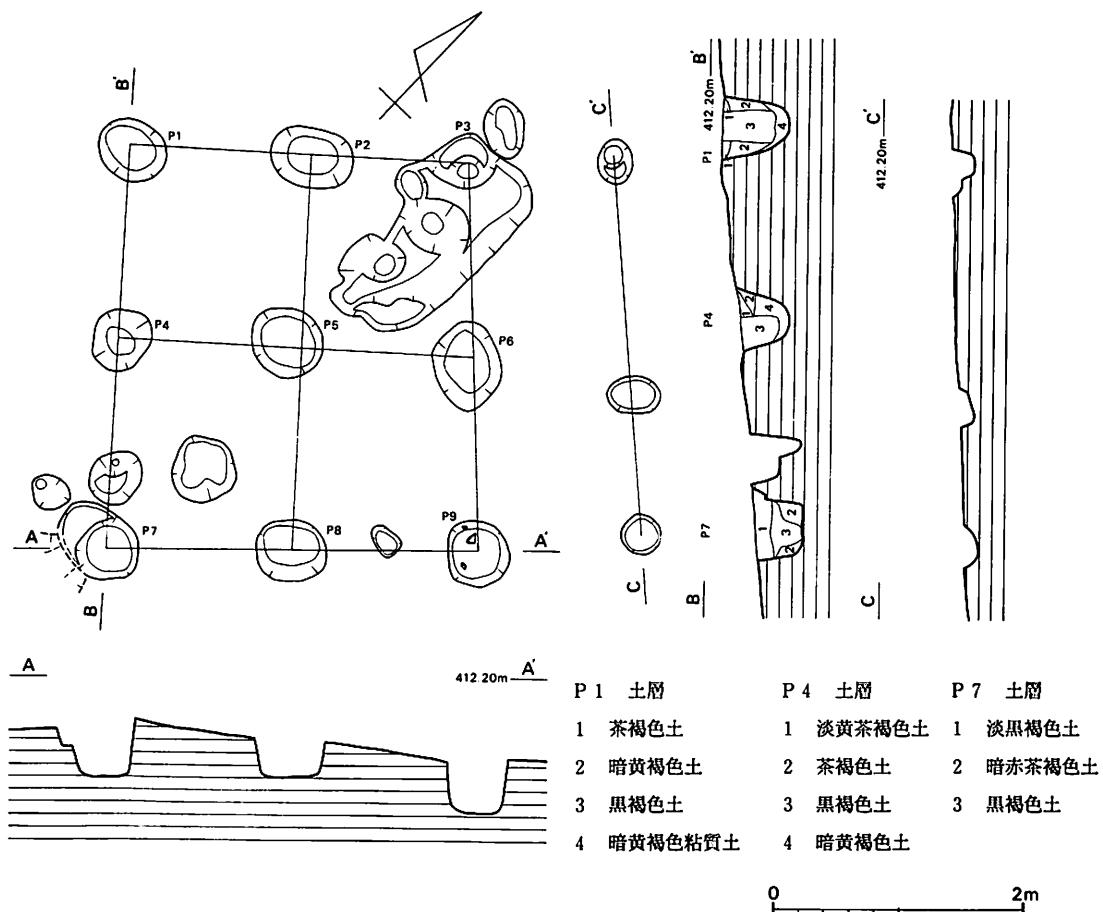
S K 1 (第22図, 図版18)

S B 1の北西にある。南西側の側縁は直線的であるが、北東側の側縁は弧状となる不整

な梢円形で、形態からすると土壙墓と考えられる。規模は最長1.6m、最大幅1.0m、深さ0.2mである。壁面は南西側では角度のある掘り込みとなっているが、南東辺・北西辺では緩やかな掘り込みである。北東側は斜面になっているため残りが悪い。底面形は小判形である。底面の規模は最長1.4m、最大幅0.8mで、平坦である。主軸方向はN33°Eである。棺構造については遺存状況が悪いため確認することはできなかった。人骨は出土していない。埋土は暗黒褐色の単層である。遺物は埋土から須恵器片と土師質土器片が出土している。須恵器片は、SB1の柱穴から出土した須恵器片と接合した。

SK2(第22図、図版19)

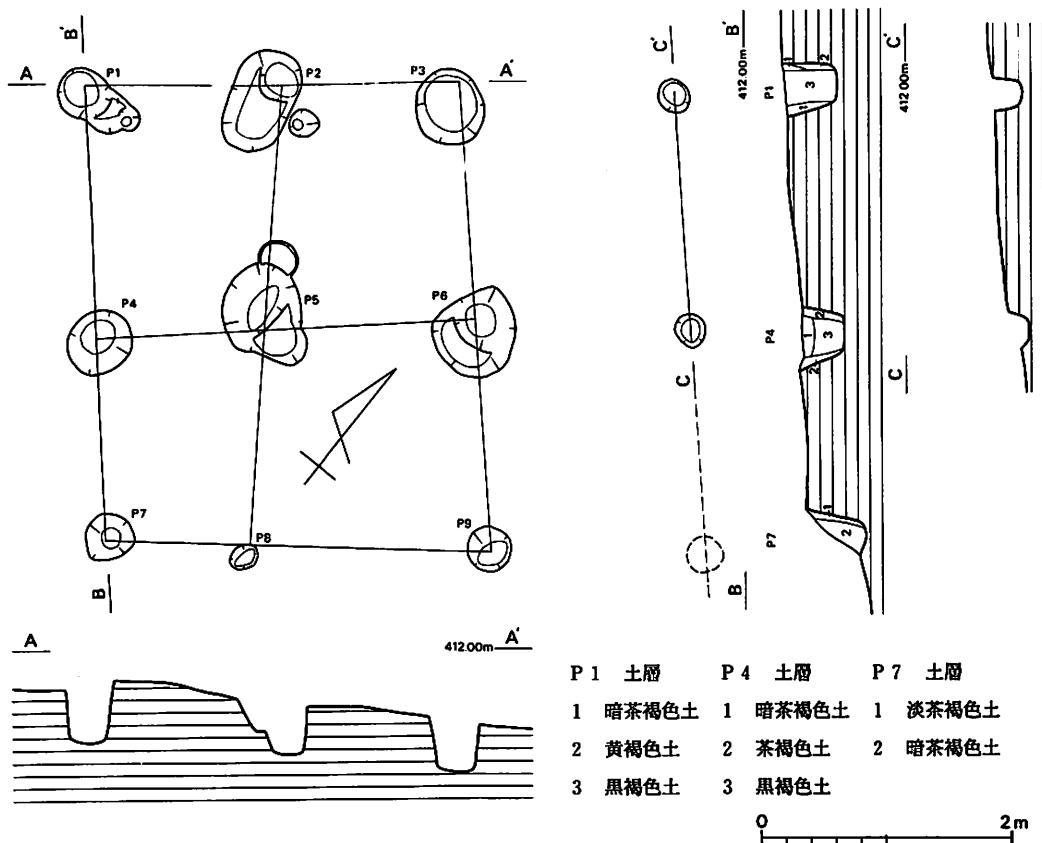
調査区の北東端にある古墓である。平面形は隅丸長方形で、断面は逆台形である。規模は長さ約1.5m、幅約1.0m、深さ約0.5mである。底面形は隅丸長方形で、底面の規模は長



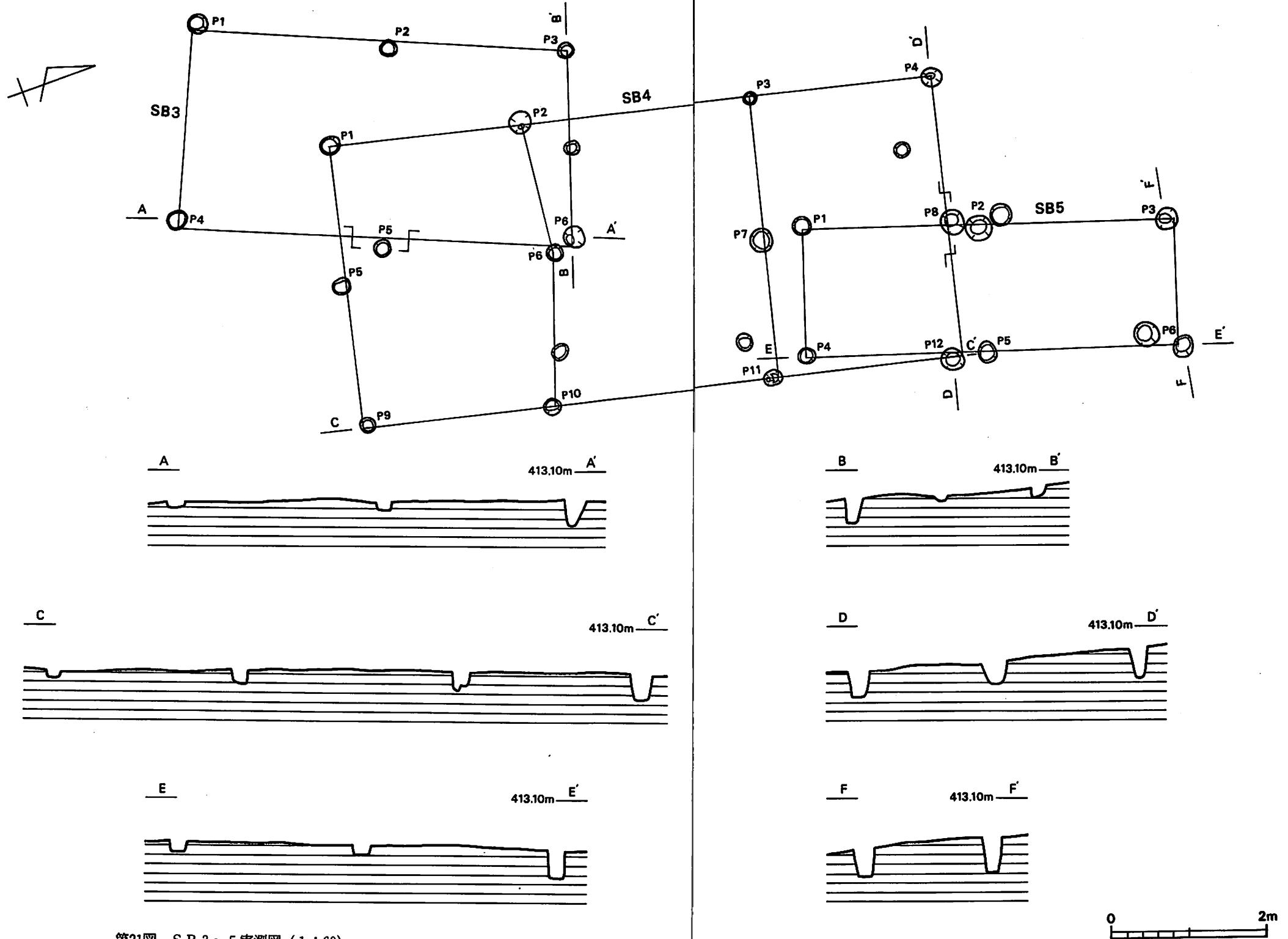
第19図 SB1 実測図 (1 : 60)

さ約1.1m、幅約0.6m、で北西辺側に「L」字状の窪みがあり、東隅にも窪みがある。深さは0.5~0.6mである。壁面は、北西辺で垂直に近く立ち上がるほかは緩やかに立ち上がる。主軸方向はN19°Eである。

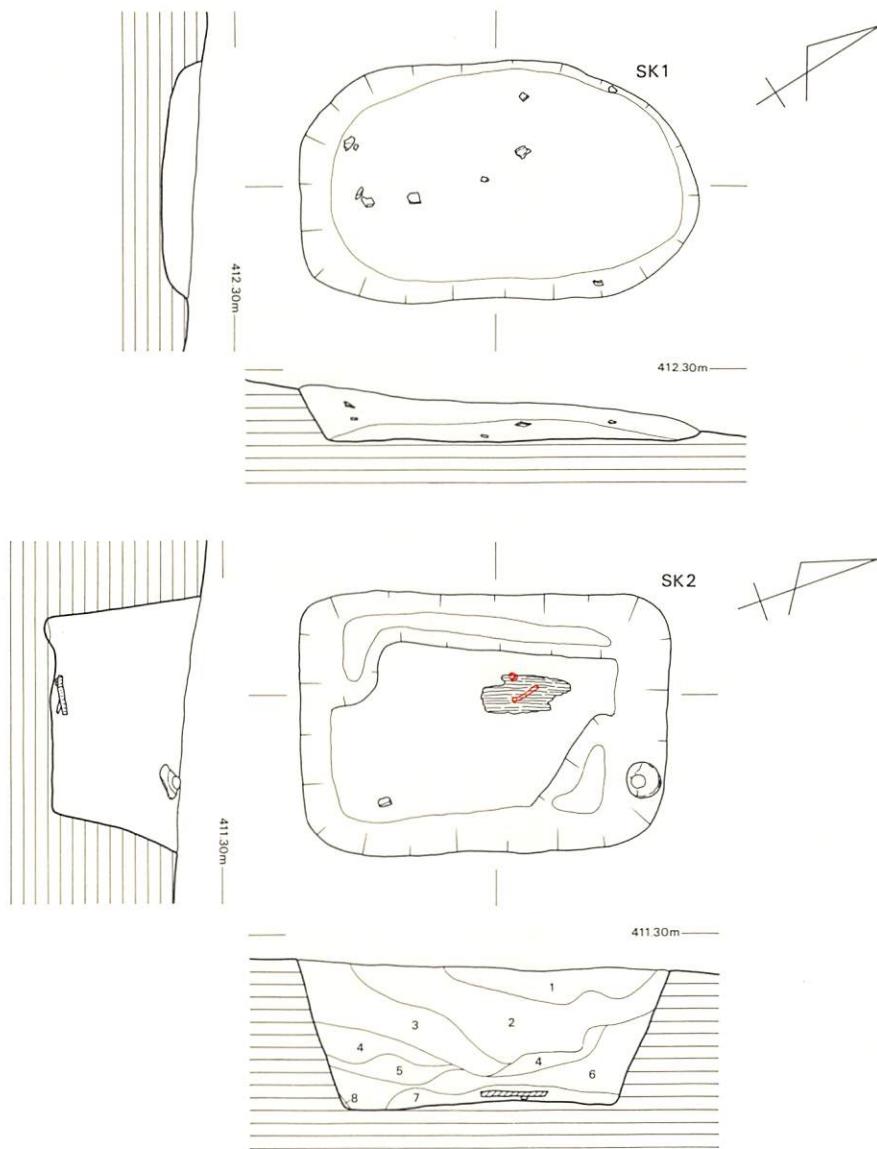
遺物は、東隅の墓壙上面から土師質土器の杯が出土した。また、底面の北西部から厚さ約3cmの木片が出土した。木片は木質の方向から推定ではあるが、棺の木蓋に用いられた木材の一部であると思われる。さらに木片の下から小柄と古銭が出土した。いずれも埋納品と考えられる。小柄は、現存の長さ約12.6cmで、柄は銅製である。古銭は、銅製であるが腐食が著しく、剝離して銭種名を判読しようとしたができなかった。枚数については、少なくとも5枚を確認できた。なお、墓壙内の人骨は確認できなかった。埋土は、黒褐色土層・黒黄褐色土層(黒褐色と地山の黄褐色土の混入土)で、古墓の盛土に使用されていたと思われる。盛土は、第7層上面までと考えられる。



第20図 SB 2 実測図 (1 : 60)



第21図 SB 3～5 実測図 (1 : 60)



- | | |
|------------|-------------------|
| 1 暗黒褐色土 | 5 暗黒褐色土 |
| 2 黒黄褐色土 | 6 黒黄褐色土 |
| 3 暗黒褐色土 | 7 灰黑色・粘質土 (木片を含む) |
| 4 淡黄褐色・砂質土 | 8 淡黄褐色・砂質土 |



第22図 SK1・2実測図 (1:30)

2. 遺物

遺物の多くは暗茶褐色土層(遺物包含層)からの出土であるが、遺構に直接伴う遺物は2点にすぎない。

(1) 遺構内出土土器(第23図1・2, 図版20)

須恵器(1)

SK 1 およびSB I 柱穴かち出土の破片が接合したひずみのある椀である。口径15.2cm, 器高5.7cmである。底部はほぼ平底で、回転ヘラ切りである。体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外上方にのび、口縁部は内傾している。口縁端部は平坦でやや角ばり、内側に肥厚している。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好で、色調は淡青灰色である。

土師質土器(2)

SK 2 埋土上層から出土した杯である。口径12.8cm, 器高3.5cmである。底部はほぼ平坦で肥厚し、底部から体部にかけて僅かに外反している。口縁端部はやや肥厚気味で丸く終わる。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好で、色調は淡橙色である。

(2) 調査区内出土土器(第23図3~10, 図版20)

弥生土器(3)

底部片で、底径は4.0cmで、窪み底である。内外面とも板ナデを施す。胎土は2~5mmの砂粒を含み、焼成は良好で、色調は淡黄褐色である。

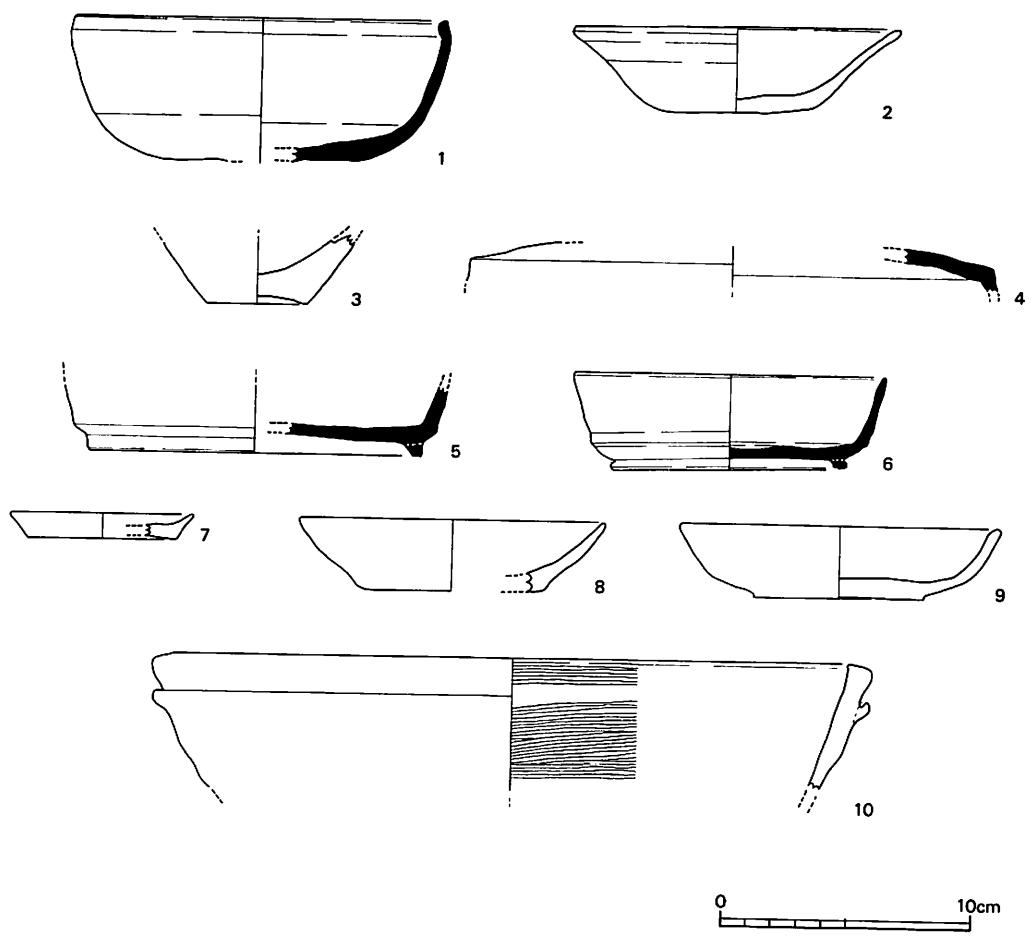
須恵器(4~6)

4は蓋である。天井部はやるやかな曲線を持ち、口縁部は外傾気味に垂下し、口縁内側には沈線がある。内外面ともナデ成形を施す。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で、色調は淡青灰色である。

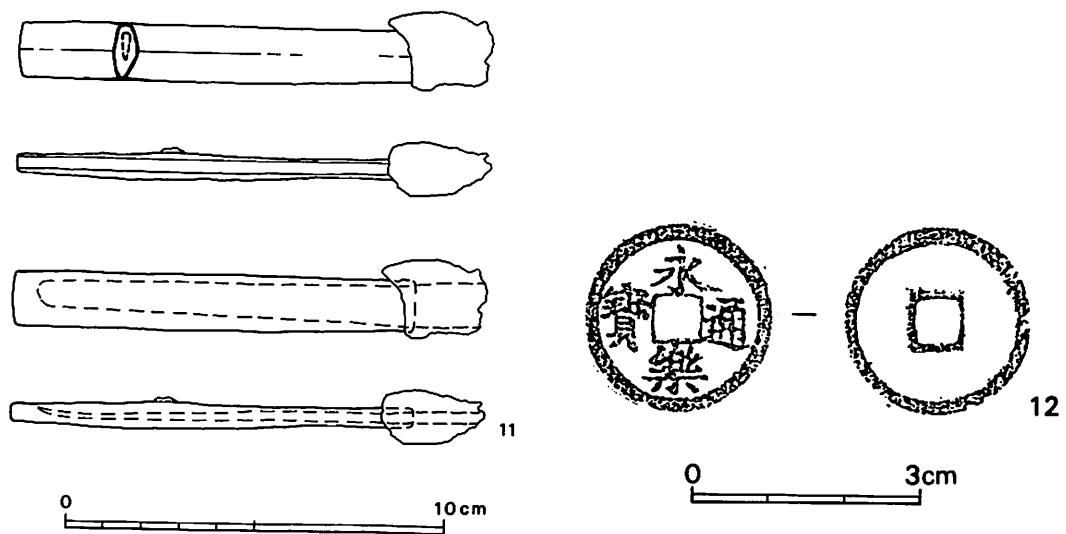
5, 6は杯である。ほぼ平底で体部との境には稜をつくり、体部は垂直に近く立ち上がる。底部外周よりやや内側に貼り付けの小さな高台が付く。内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後仕上げナデを施す。焼成は良好で、色調は淡青灰色である。胎土は砂粒を少量含む。6は、ほぼ平底で体部との境に明瞭な稜をつくり、体部は垂直に近く立ち上がる。底部外周よりやや内側に貼り付けの小さな高台が付く。高台の外面は丸く、内面は角ばっている。高台端部下面には浅い凹線がある。口縁端部は、尖り気味で丸く終わる。内外面ともナデ成形を施す。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で、色調は淡青灰色である。

土師質土器(7~10)

7は小皿で、底部は肥厚し体部は直線的に外上方へ短くのびる。口縁端部は、尖り気味



第23図 出土遺物実測図 (1 : 3)



第24図 SK 2 出土小柄実測図 (1 : 2)

第25図 古銭拓影 (1 : 1)

に丸く終わる。胎土は砂粒を僅かに含み、焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。

8は杯で、底部は平底とみられ、体部は外上方へ直線的にのび、口縁端部は尖り気味に丸く終わる。胎土は砂粒を僅かに含み、焼成はやや不良で、色調は淡黄灰色である。9も杯で、底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部にかけて直線的にのび、口縁端部は丸く終わる。内外面とも回転ナデで、底部は回転糸切りである。胎土は砂粒を僅かに含み、焼成は良好で、色調は淡黄灰色である。

10は鍋で、体部斜め上方に直線的で、口縁端部は平坦で角ばる。体部外面に断面がほぼ台形のツバ貼付けがある。口縁部・体部外面ヨコナデ、口縁部・体部内面ヨコハケ目である。胎土は砂粒を僅かに含み、焼成はやや不良で、色調は淡灰褐色である。

(3) 調査区内出土金属製品(第24・25図、図版20)

11は小柄で、現長12.5cm、幅1.5cmである。柄は銅製で、胴央は膨らみをもち、茎の棟幅は約0.3cmである。

12は永楽通寶で、黒褐色の旧耕土から出土した。径は2.5cm、重さ2.7gである。明代の永楽6(1408)年が初鋳年である。

VII. まとめ

高山1・2号遺跡の調査については先述のとおりである。また、両遺跡からは各時代の遺物が出土しており、早くから生活の場所として適地であったことが知られたが、ここでは、両遺跡の遺構や遺物について若干のべてまとめたい。

1 高山1号遺跡の遺構について

本遺跡では、南東側一帯が著しく削平されているため、遺構の全容を知ることはできなかつたが、この一帯にも多くの遺構があったと推定される。また、本遺跡の立地状況からすると、通称世羅広域農道の南側にも広がっている可能性があろう。なお、西1～3区は西側の小河川に沿う水田とは一段高くなっているなどの状況からすると、古墓群のある西3区の一帯は以前からの水田ではなく、雑種地や畠地として利用されてきた土地で、後になって水田になり、地元の人の話では、昭和初期に現在の状況になったとのことである。

本遺跡ではこの南東側一帯を除く調査区内で多数のピットや柱穴とみられるものを検出したが、掘立柱建物跡は4棟検出したにすぎない。また、これらの建物跡は、時期決定の目安となる遺物を伴っていないため、時期の詳細を知ることはできないが、建物跡付近から出土の遺物は土師器・須恵器のほか、中世の土師質土器・須恵質土器・中国製の青磁・白磁片・近世の唐津焼や伊万里系の磁器類などが出土している。なかでも土師質土器が多いことからすると、本遺跡の主たる時期は中世と考えられる。なお、これらのピット・柱穴群のなかで少なくとも8枚の土師質土器の皿が一括して出土したピットがあるが、これはいわゆる、⁽¹⁾地鎮などの建物に関するまじないが行われた可能性を窺わせる。

掘立柱建物跡のうちSB1は総柱の建物で、SB2・3とは桁行の方向が異なり、梁行の柱間の寸法にも違いがあることからすると、時期が異なるとみられる。SB2・3は桁行の方向がほぼ直角で、梁行の柱間の寸法もほぼ同じであることからすると、同一時期と推定される。また、SB4はSB1と約30m離れ、SB2・3と約20m離れており、桁行の方向や柱間の寸法も、SB1～3とは異なっている。したがって、これらの建物跡とは時期が異なるとみられる。なお、SB4の柱穴は25～30cm前後とそれほど大きくないが、梁行の寸法は約4.4mと建物跡のなかでは最も長い。

西3区で検出した10基の古墓は、北側の一段下がった水田との境にほぼ直線的に並んでいる。地元の人の話によると、このあたりが墓地で、「元禄十三辛巳」銘の墓石はこの古墓

の群の付近にあったことを覚えており、家族墓としてその所在が伝えられてきたようである。

10基の古墓は、SK 1・2とSK 3との間が約3.5m離れており、SK 3～6の間隔からすると2基設けることが可能であるが、この場所には古墓は存在しなかった。また、SK 6・7は切り合っており、SK 8が6・7に接するほかはほぼ等間隔で並んでいることや、土壙内に墓標と考えられる石が落ち込んでいることからすると、地表上で古墓の位置が確認されていたと推定される。

これらの古墓には、平面形が円形の土壙(SK 1～5・8・10)と、長方形もしくは橢円形の土壙(SK 6・7・9)がある。また、前者はさらに底面径が0.65～0.74mの大型の土壙(SK 1・3～5・8)と、底面径が0.5m弱の小型の土壙(SK 2・10)に分けられ、規模からすると小型の土壙は小児や乳幼児用と考えられる。SK 3・4では棺材の一部が確認できたが、この例からすると、平面形が円形の他の土壙も桶形の木棺を入れていた可能性がある。長方形もしくは橢円形の土壙は箱形の木棺の可能性もあるが釘は出土していない。蓮や布などに包んで、そのまま埋葬していたことも考えられる。

古墓からの遺物はSK 7の土師質土器の杯のみである。このほかには副葬品がないために古墓群の時期は不明であるが、SK 7の土師質土器や土壙の形態からすると中世～近世頃と推定される。先述の「元禄十三辛巳」銘の墓石はどこに据えられていたかは明らかではないが、古墓群の時期を推定する傍証となろう。

本遺跡では、縄文時代晩期土器・弥生時代前期土器・山陰系古式土師器・須恵器・東播系須恵質土器・中国製磁器・瓦質土器・亀山焼・瀬戸焼・備前焼・唐津焼・伊万里系磁器などが出土したが、これらの遺物に伴う遺構は確認出来なかった。土師質土器や伊万里系磁器が最も多く、他は少量で器種も限られているが、この地域における遺物の需要を考えるうえで注目される。中世～近世の土器・陶磁器類は、中国製の青磁・白磁の碗を除くと、皿・杯・鍋・甕・碗・すり鉢などであるが、いずれも日常生活で使用されている器種である。青磁・白磁については、遺跡の南側に高山城跡があり、この遺跡とのかかわりを考慮する必要があろうと思われる。

2 高山1号遺跡出土の縄文時代晩期の土器について

調査区東1区包含層から出土した土器は、遺構に伴った土器群ではない。したがって若干時期差が存在することも考えられるが、広島県内では類似のまとまった資料はほとんど出土していない。細分は将来の課題として、ここでは一時期の土器群として一括し、年代

的な位置づけなどを考えてみたい。

出土土器の器種構成は、精製の壺・浅鉢・粗製突帯文深鉢である。土器は完全に無文化している。従来、県内の縄文時代晚期後半期の土器としては、広島市東区中山遺跡(中山B式)⁽²⁾、芦品郡新市町神谷川遺跡⁽³⁾、比婆郡東城町帝釈峠寄倉岩陰遺跡⁽⁴⁾2層上層土器などが知られている。これらの土器はいずれも黒土B II式併行期頃と考えられていた土器群である。このうち中山B式は、黒色磨研の口頸部がくびれて長く延びる浅鉢や、突帯文の深鉢は口縁部の直下に刻み目突帯をめぐらせ、突帯直下に斜行または弧状の沈線や刻み目をえたものが多いなど、高山1号遺跡出土一括土器より古い要素を有する。神谷川遺跡出土土器も、波状口縁の深鉢、口頸部がくびれて長く延びる浅鉢の存在など、やはりやや古い様相を帶びている。一方、これらの内最も新しい土器群と考えられる帝釈峠寄倉岩陰遺跡2層上層出土土器群には、精製の壺が含まれておらず、浅鉢類に沈線文を多用しているなどの点でやはりやや古い様相を帶びているといえる。

近県での出土例を見てみると、岡山市百間川沢田遺跡高縄手B調査区土器溜り13、14出土土器が同様の土器群から構成され、同時期の土器群と考えられる。この土器群は黒土B II式土器よりも新しく、近畿地方の船橋式に併行する時期と考えられ、沢田式と称される一群である。北部九州の板付I式にも併行する時期の土器群であろう。

高山1号遺跡調査区東1区出土土器は、小片が多く、全体を復元できる個体は少なかつた。したがって詳細の不明瞭な点も多い。こうした制約の中で、沢田遺跡出土土器と高山1号遺跡出土土器を対比すると、深鉢の底部は前者が平底であるのに対して、後者は丸底ないしは尖底に近いものが多い。精製土器はいずれも平底のようである。近畿地方では、深鉢底部は船橋式では平底化し、尖底気味の丸底はそれ以前の滋賀里IV式までのようにある⁽⁶⁾。深鉢底部の平底化という観点のみから見れば、高山1号遺跡出土土器は沢田遺跡出土土器よりも若干古い一群といえる。今後の検討課題の一つである。

今回出土した縄文時代晚期土器群は、晚期後半期の良好な一括土器である。縄文時代から弥生時代への移行を考えるうえで、今後指標となりうる資料と言えるであろう。

3 高山2号遺跡の遺構について

本遺跡は、南側の一帯が水田によって削平されており、調査範囲が限られているなどの状況にあったが、掘立柱建物跡や土壙を確認した。これらの遺構や立地状況からすると、本遺跡は調査区よりもさらに北側に広がっている可能性がある。

本遺跡からは総柱建物跡2棟・掘立柱建物跡3棟・土壙墓1基・古墓1基を検出した。

2棟の総柱建物跡の規模は、桁行方向で2.9～3.0m、梁行方向で3.2～3.6mと若干の差はあるもののほぼ同じである。また、柱穴の規模も径0.4～0.7m、深さ0.3～0.5mとほぼ同じである。この2棟は桁行方向が若干ずれているものの同時期に建てられたものと思われる。なお、2棟とも北東の桁行方向に3本の柱穴があって(SB2の南東側の柱穴は水田によって削平されていた。)建物の規模が北東方向に広がる可能性もあるが、現状では建物前面の塀、あるいは建物に付随する庇の可能性が高いと思われる。建物跡の時期は、SB1の柱穴(P1・P2)の締め土から古代頃とみられる須恵器片が出土しており、この2棟の総柱建物跡の時期は、古代以降と考えられる。

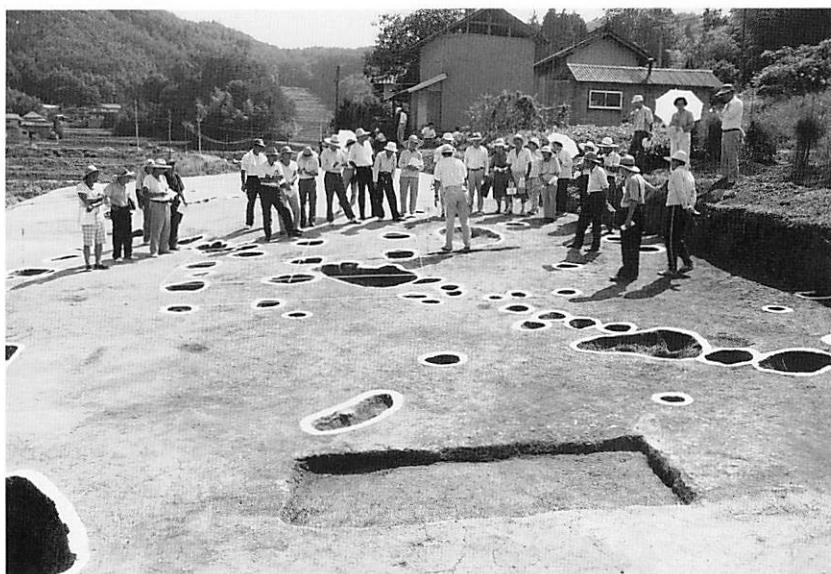
3棟の掘立柱建物跡のうちSB3とSB5は同時期に存在した可能性があるが、いずれも規模からみて住居用とは考え難く住居に付随する建物跡とみられ、調査区の西側に住居となる遺構があると思われる。SB4については、規模からみて住居に使用された可能性もある。掘立柱建物跡3棟の時期については出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、柱穴の規模や柱間の距離などから推定すると中世以降の可能性が考えられる。

本遺跡で検出した2基の古墓のうちSK1は、残存する上面が少ないため本来の深さは明らかでない。棺材片や棺を用いた痕跡が無いことから直葬の可能性が考えられる。なお、SK1からは須恵器片が出土しているが流れ込みの可能性もあり、時期は特定し難い。SK2は木棺を用いた墓壙である。出土した土師質土器の杯・小柄・古銭は、供物用食器、冥土用の護身具・冥錢と考えられる。時期は、出土の土師質土器と小柄から中世後半から近世初頭と考えられる。なお、古銭は腐食が著しく、判読は不可能であった。

註

- (1) 鳩谷和彦「地鎮め、遺構の諸相」「第3回関西近世考古学研究大会 近世都市の構造 発表要旨」関西近世考古学研究会 平成3(1992)年
- (2) 松崎寿和・潮見浩「広島県中山遺跡」「日本農耕文化の生成」 昭和35・36(1960・1961)年
- (3) 脇坂光彦・小都隆「芦品郡新市町神谷川遺跡の資料」「地歴部誌」第4号 昭和51(1976)年
- (4) 戸沢充則他「III 帝釈峡寄倉岩陰遺跡の第2次調査と二、三の問題」「帝釈峡遺跡群の調査研究」2 帝釈峡遺跡群発掘調査団 昭和40(1965)年
- (5) 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」 昭和60(1985)年
- (6) 家根祥多「4近畿地方の土器」「縄文文化の研究」第4巻 雄山閣 昭和56(1981)年

図版



高山2号遺跡 遺跡見学会

高山1号遺跡

図版1

a 高山1・2号遺跡

遠景（北から）

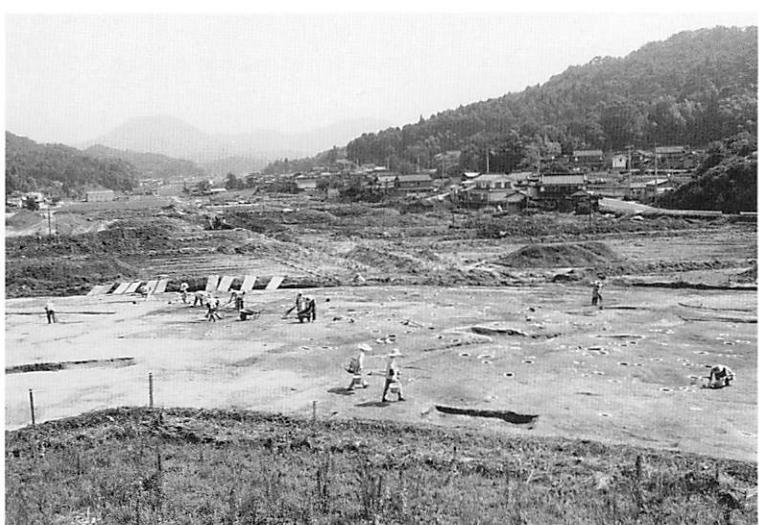


b 高山1号遺跡調査前

遠景（北東から）

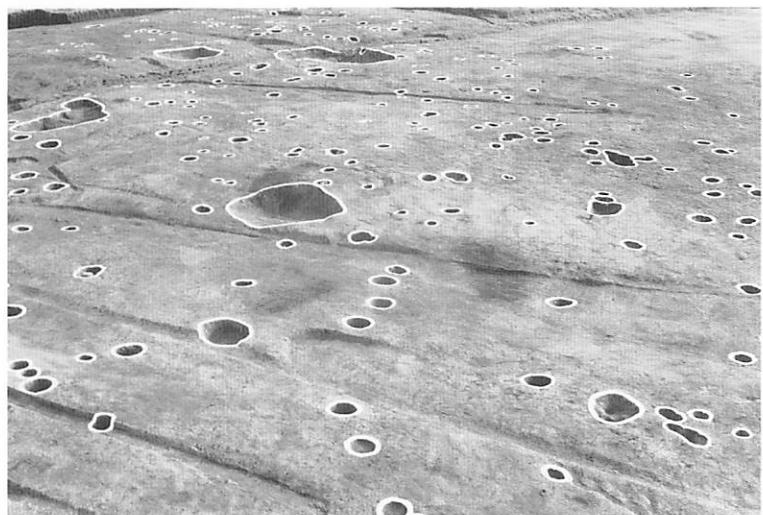


c 同上近景（南から）



図版 2

a 東1・2区、西1・
2区近景（北から）



b 西1・2区近景
(北東から)

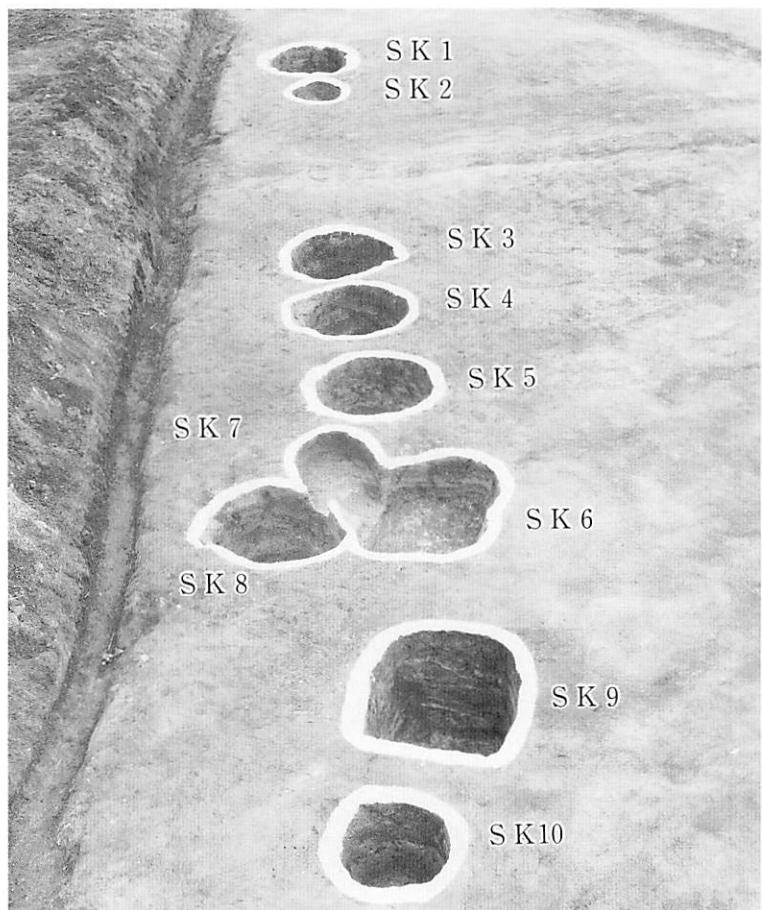


c S B 4 完掘状況
(北東から)



図版3

a 古墓群全景
(北西から)



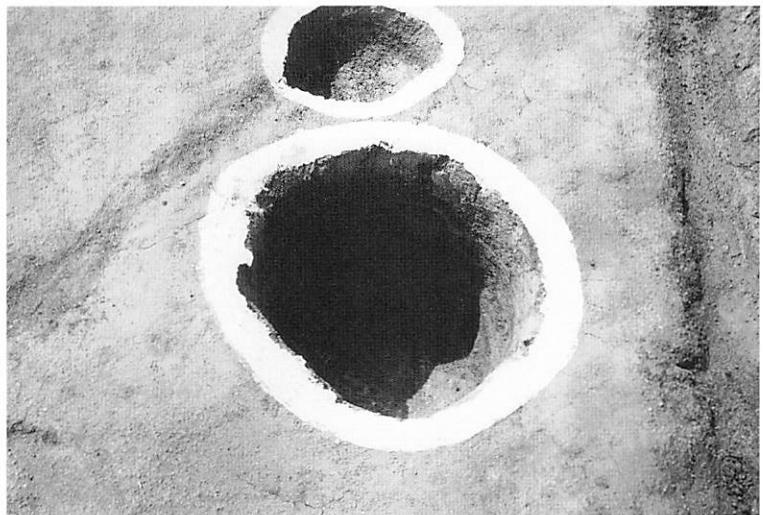
b 古墓群作業風景
(北東から)



図版 4

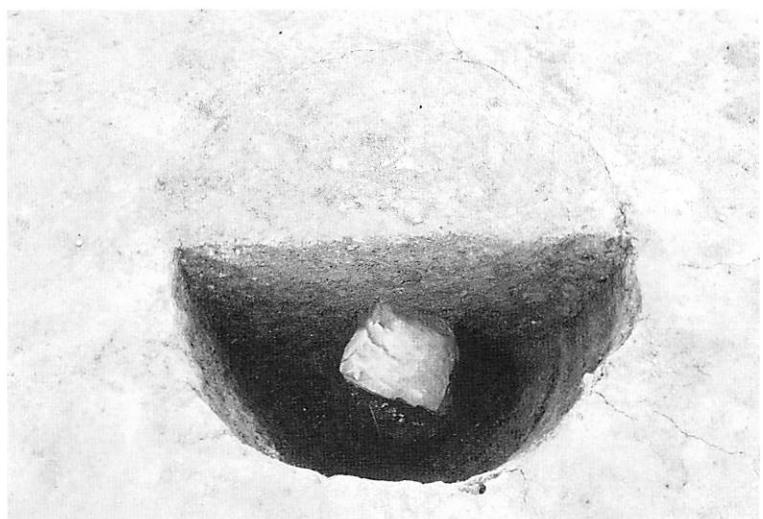
a SK 1・2 完掘

状況（南東から）



b SK 3 断面状況

（北西から）



c SK 3 完掘状況

（北西から）

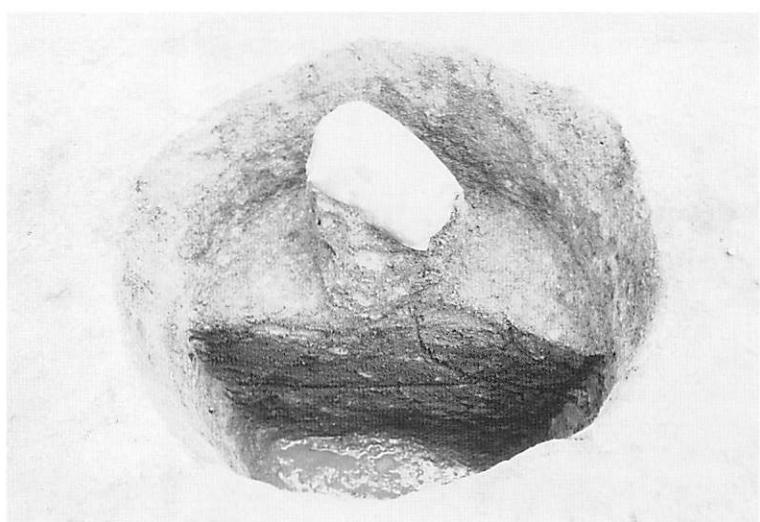


図版 5

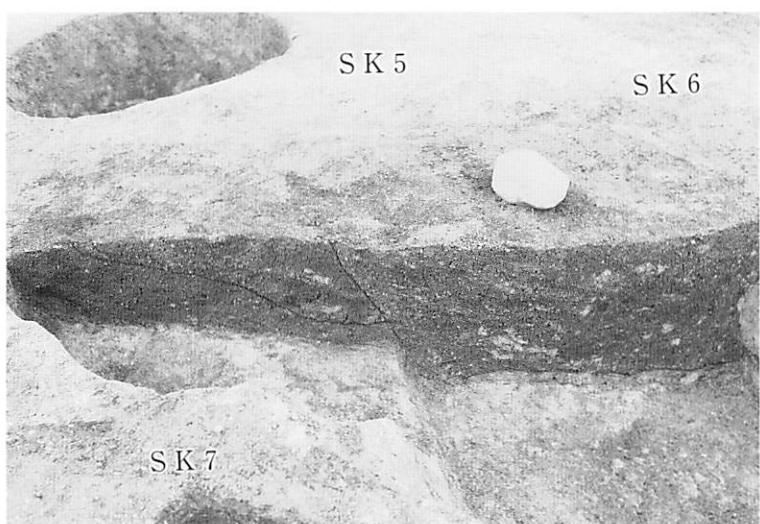
a SK 4 完掘状況
(南東から)



b SK 5 検出状況
(北西から)



c SK 6・7 断面
状況 (北から)



図版 6

a SK 7 完掘状況

(南西から)



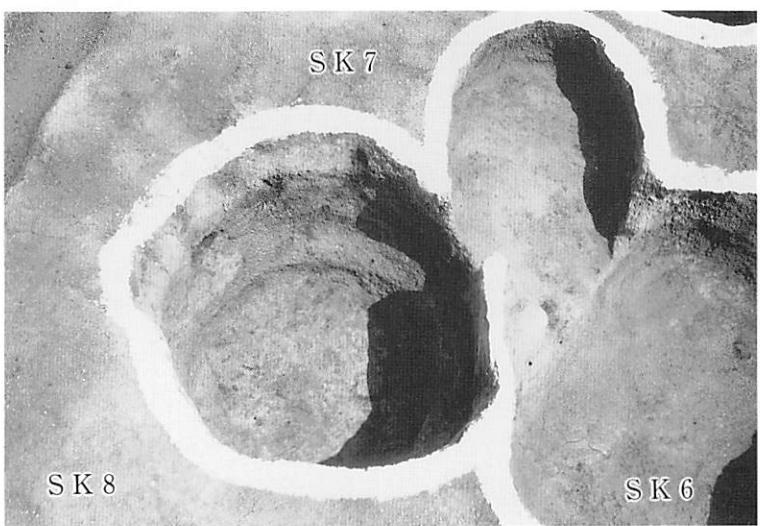
b SK 8 断面状況

(北西から)



c SK 6～8 完掘

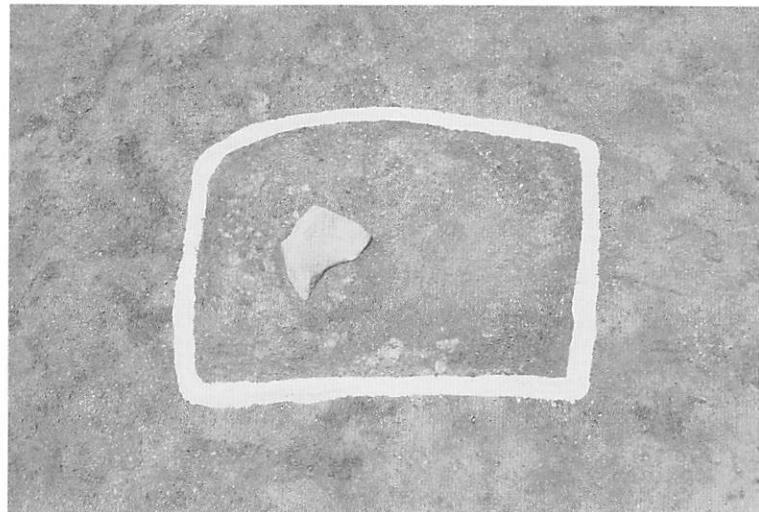
状況 (北西から)



図版 7

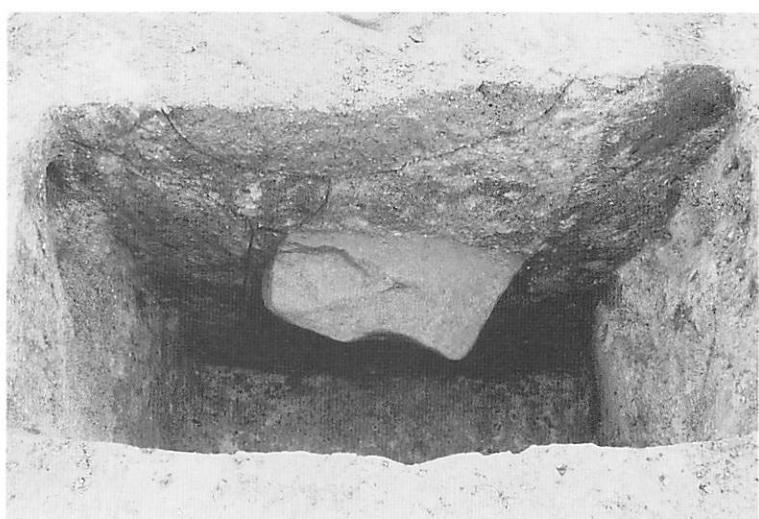
a SK 9 検出状況

(北東から)



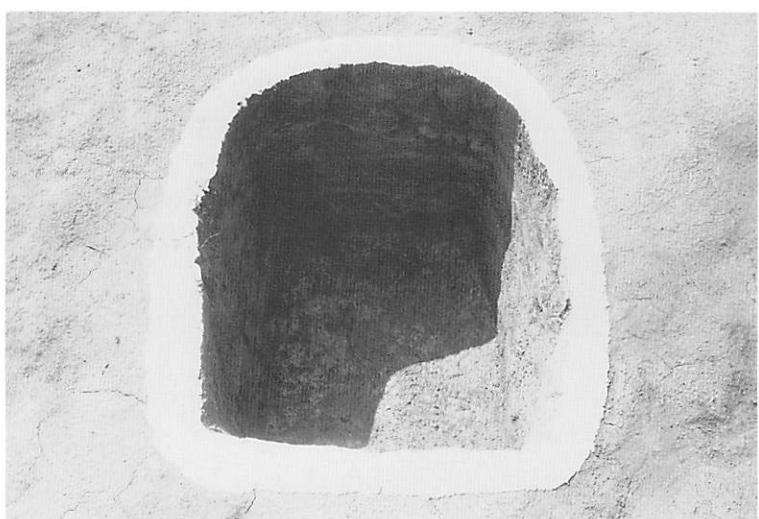
b 同上断面状況

(北西から)



c 同上完掘状況

(北西から)

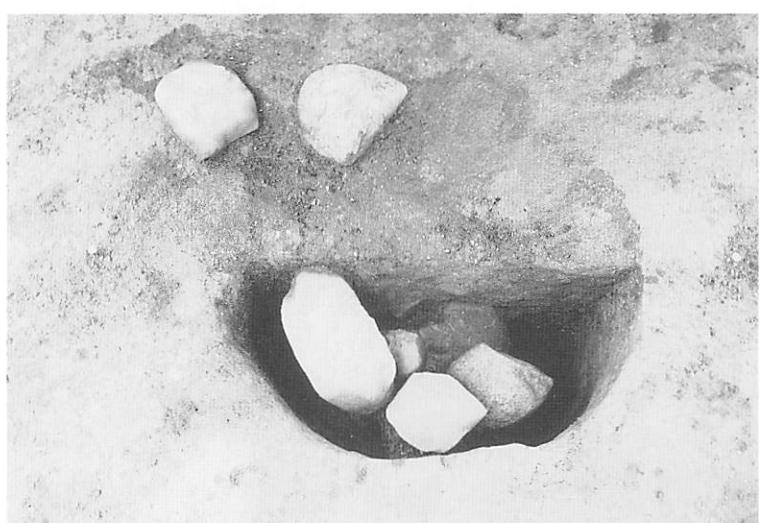


図版 8

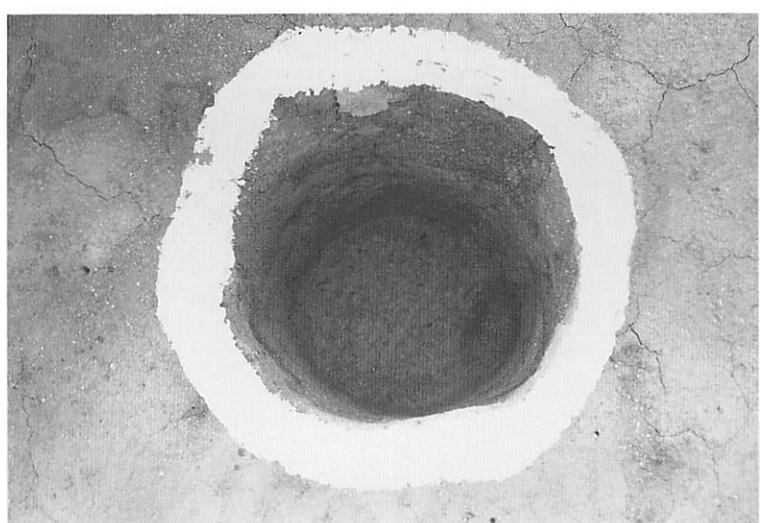
a SK10検出状況
(北西から)



b 同上断面状況
(北西から)



c 同上完掘状況
(北西から)



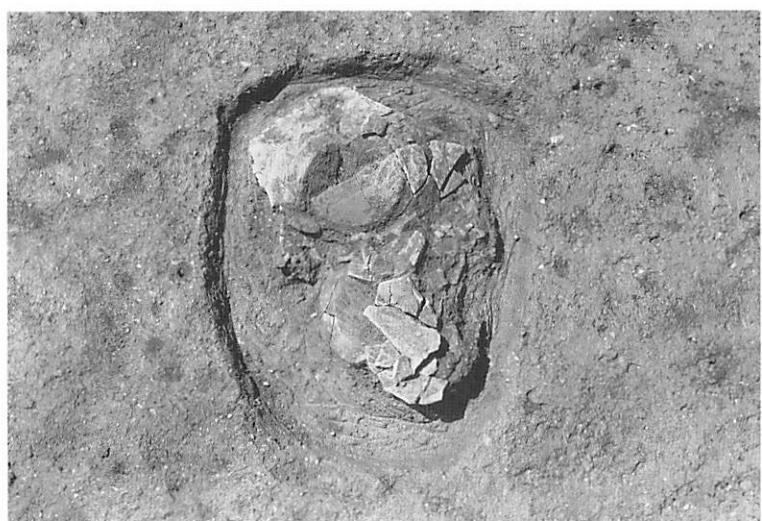
a SX 1 検出状況

(北東から)



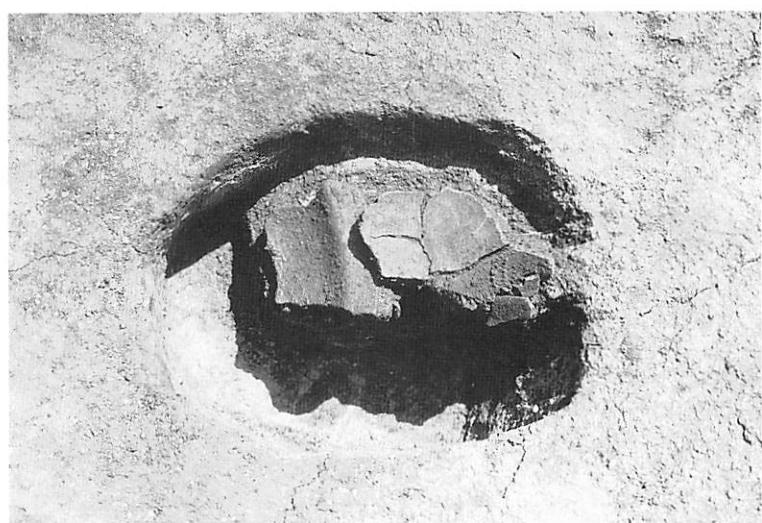
b 遺物 (1~8) 出土

状況 (南東から)

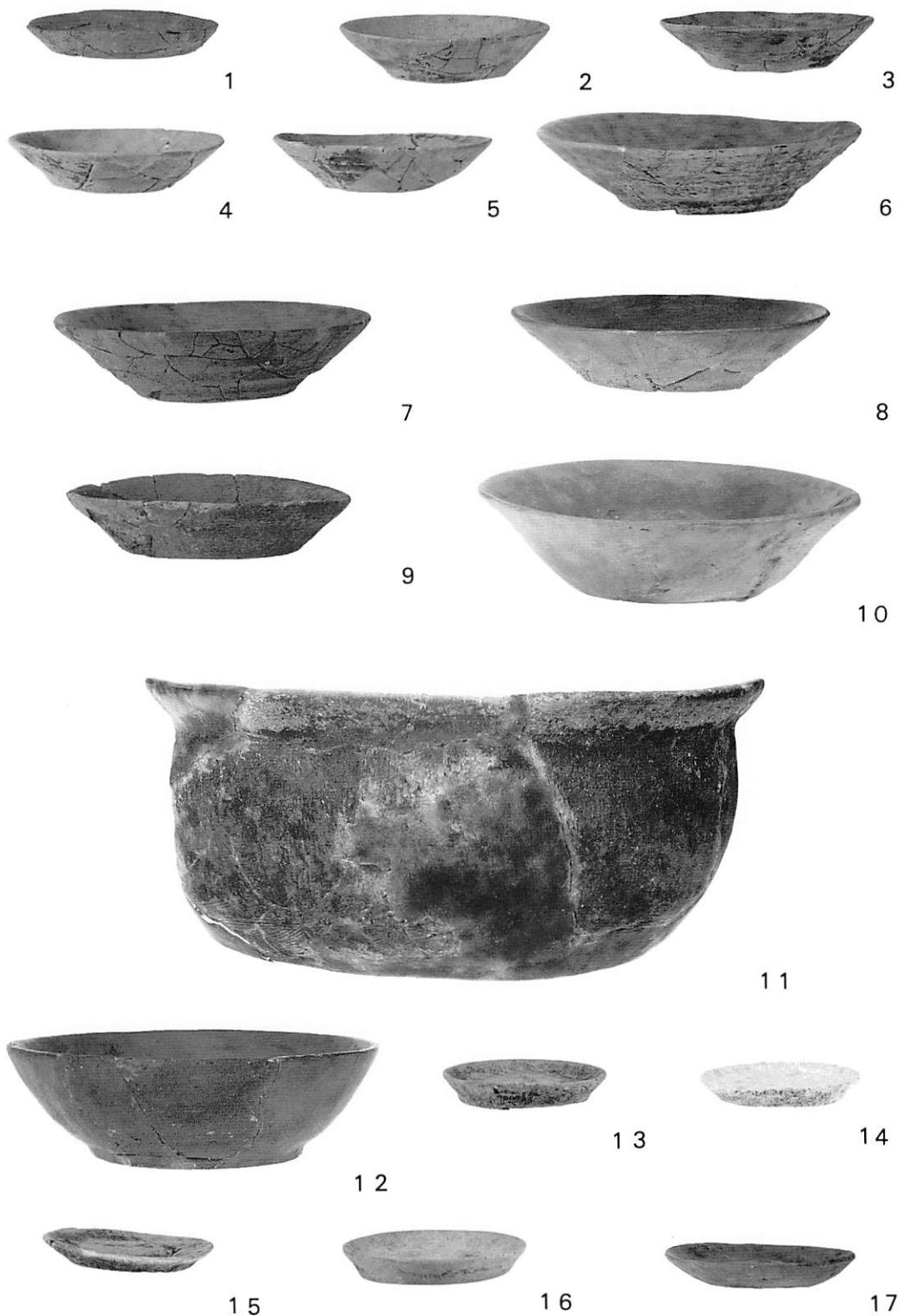


c 遺物 (11) 出土

状況 (南東から)

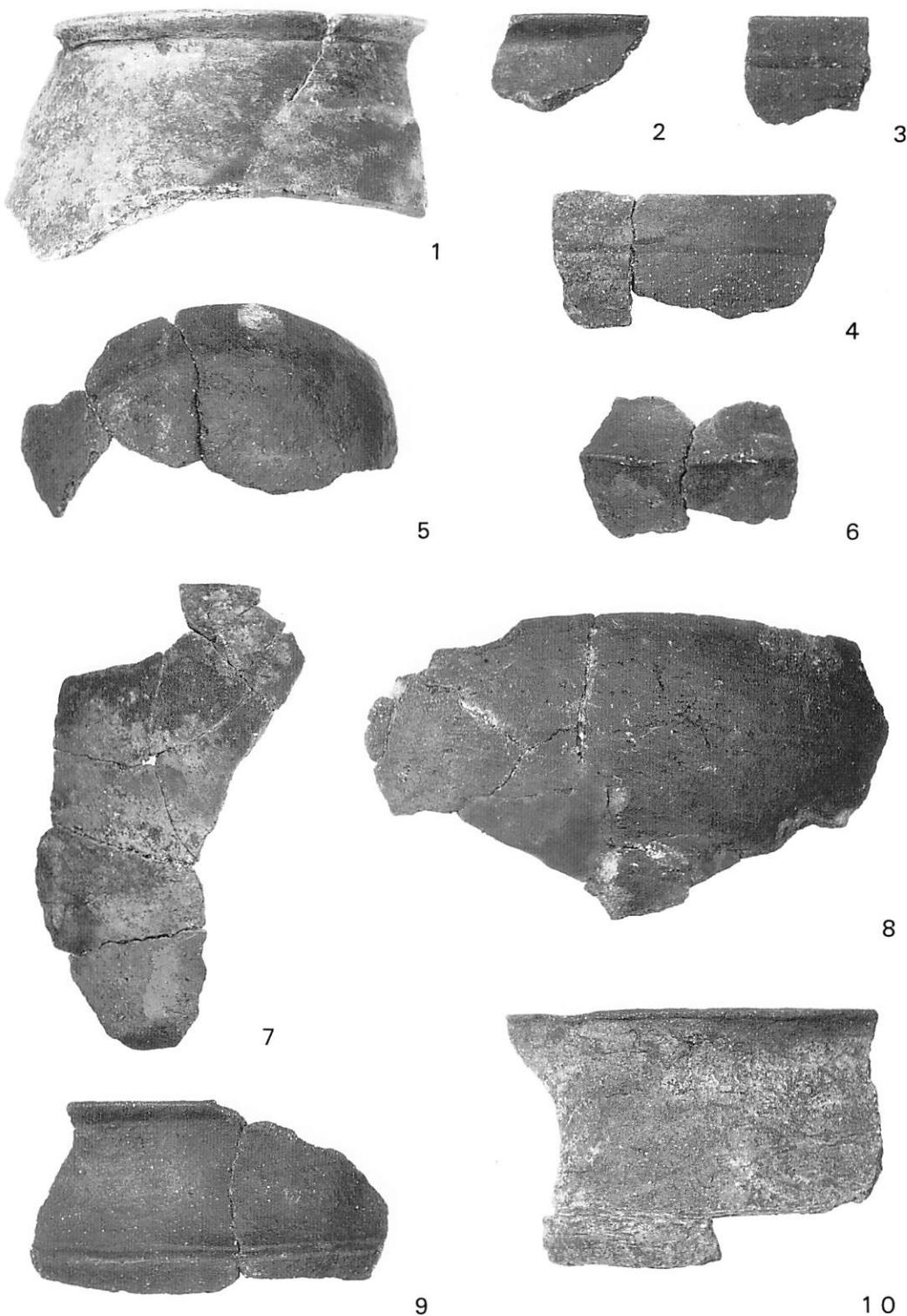


図版10

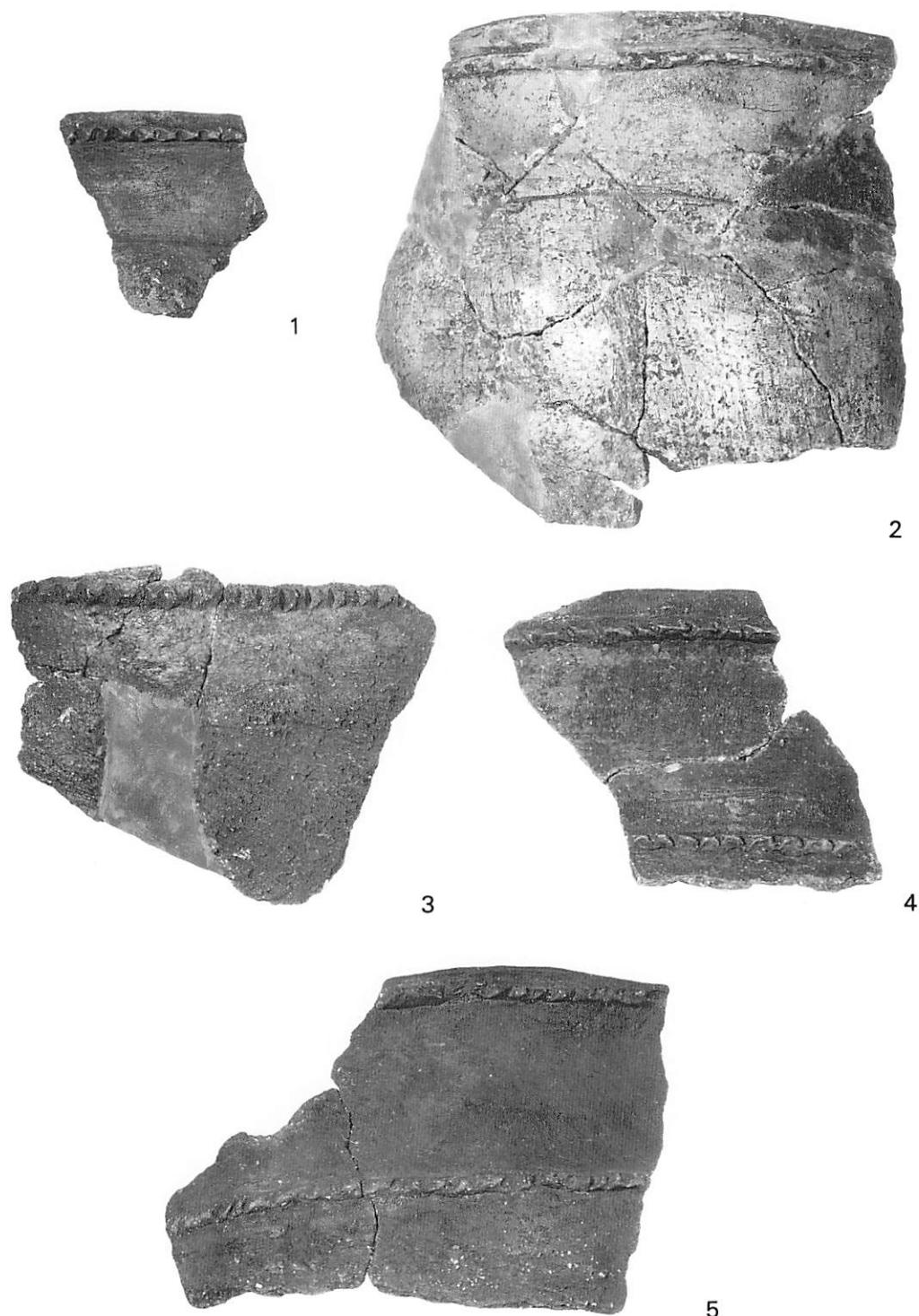


出土遺物 I

図版11

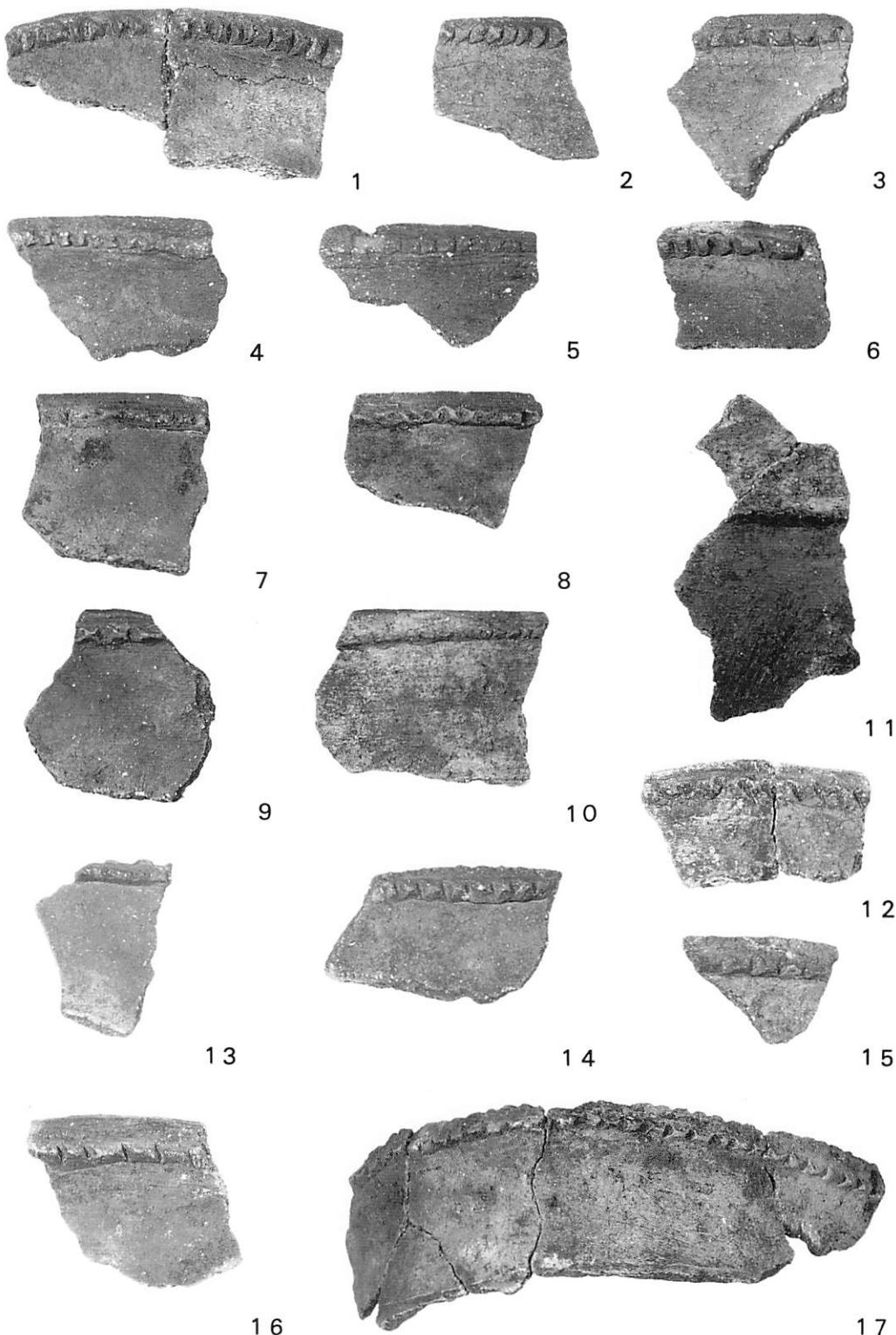


出土遺物 II



出土遺物 III

図版13



出土遺物 IV

図版14



18



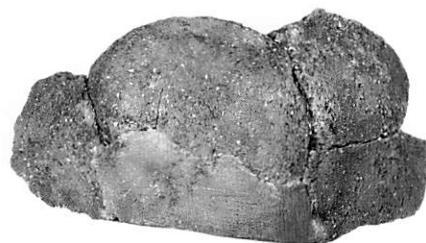
19



20



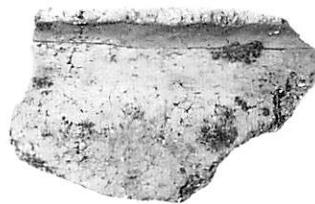
21



22



23



24



—



—



—



—



—



—



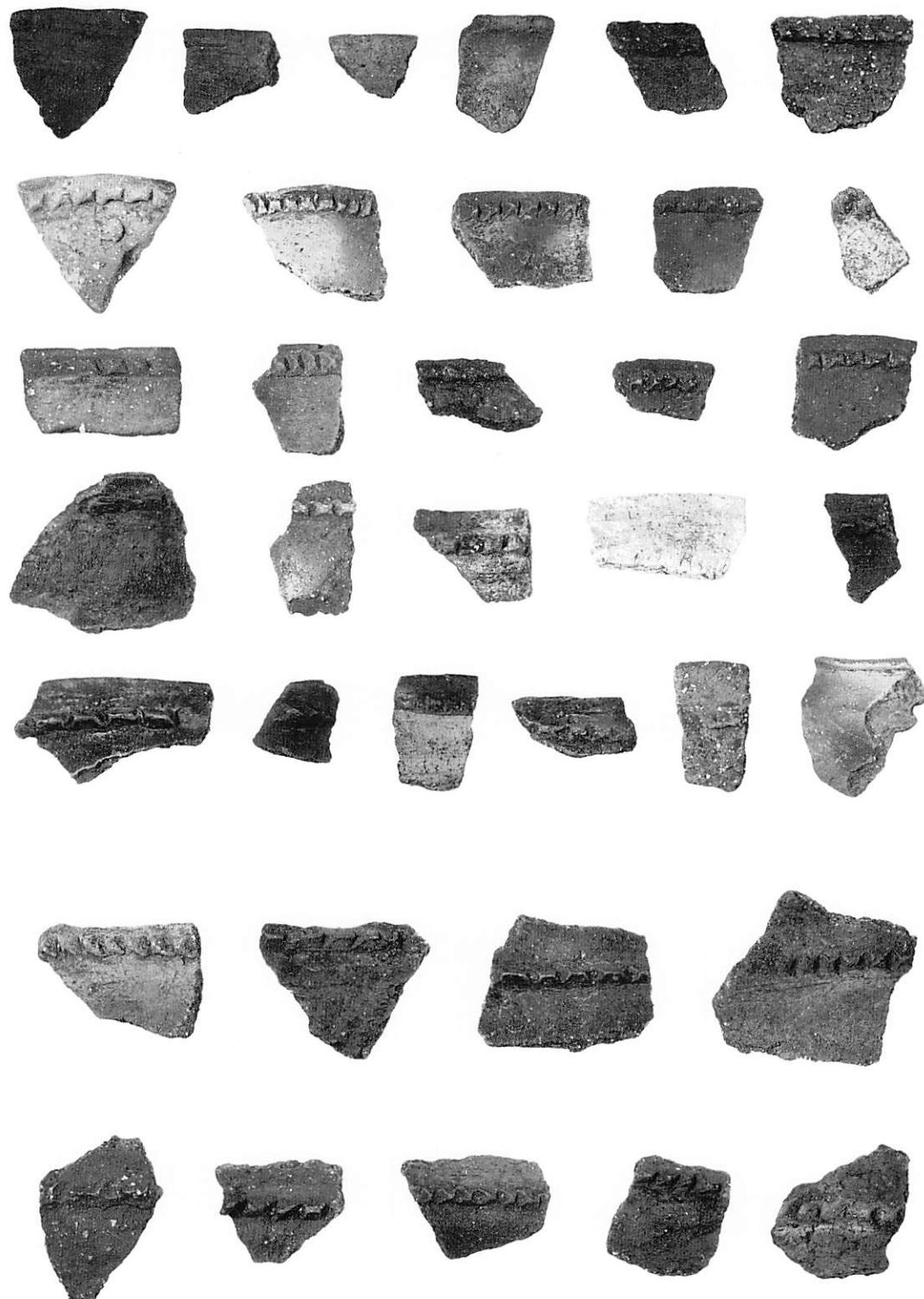
—



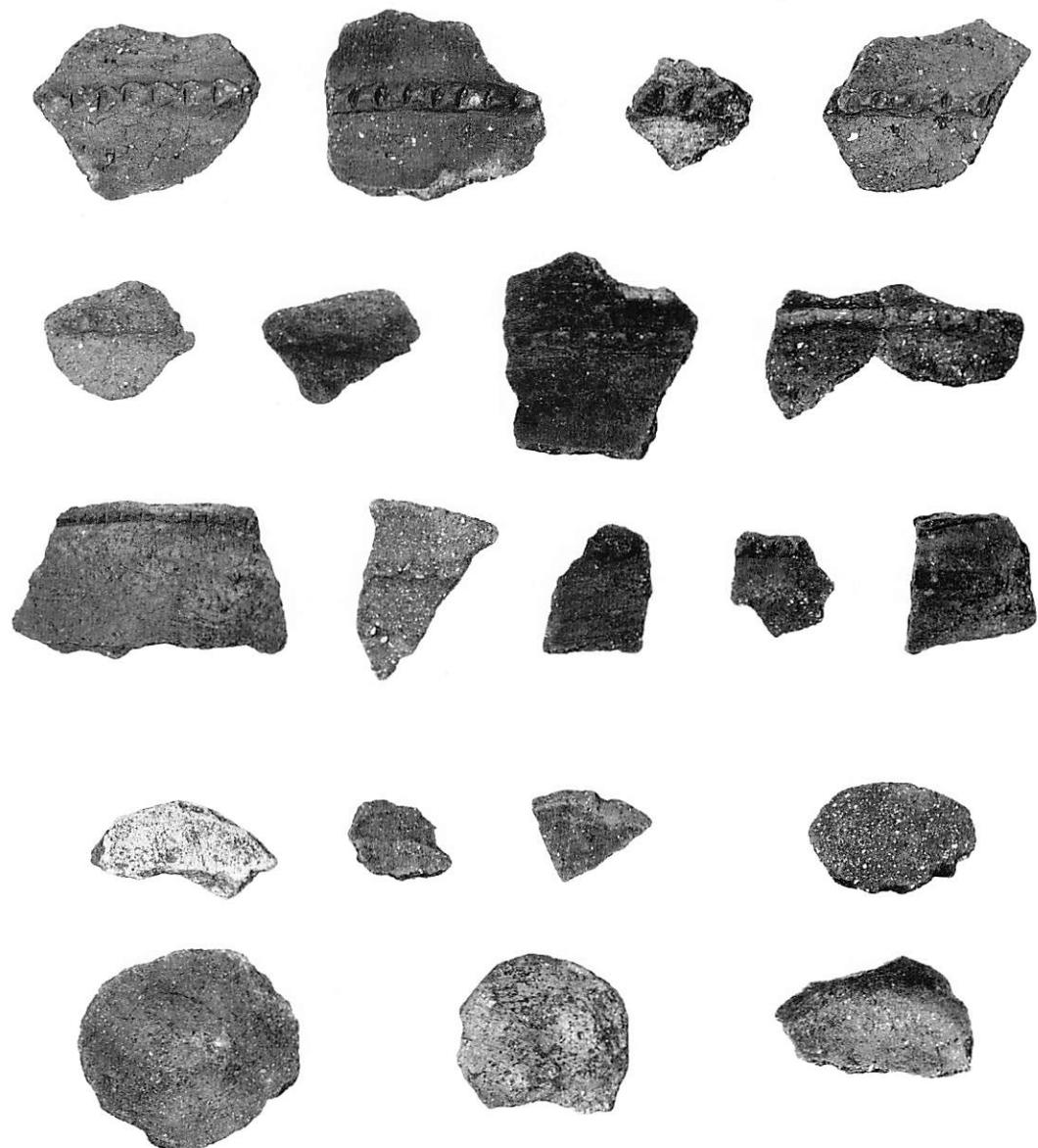
—



出土遺物 V (東1区出土土器)



出土遺物 VI (東1区出土土器)



出土遺物 VII (東1区出土土器)

高山 2 号遺跡

図版17

a 高山 2 号遺跡

作業風景（北から）

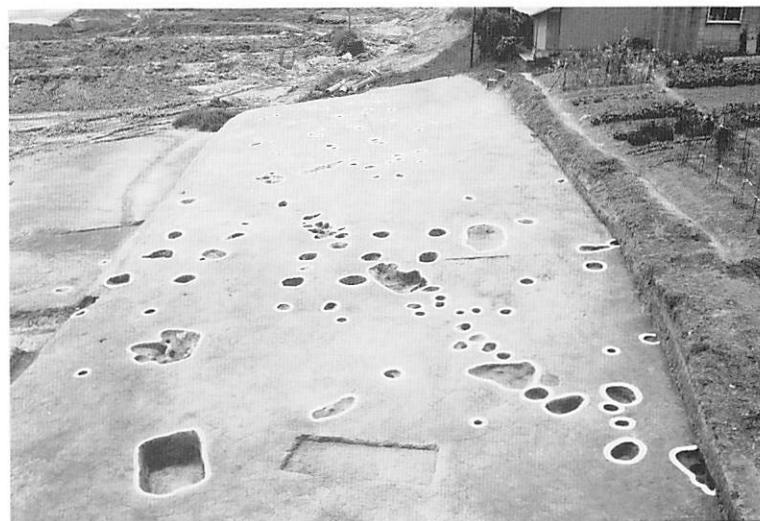


b 同上（東から）



c 調査区全景

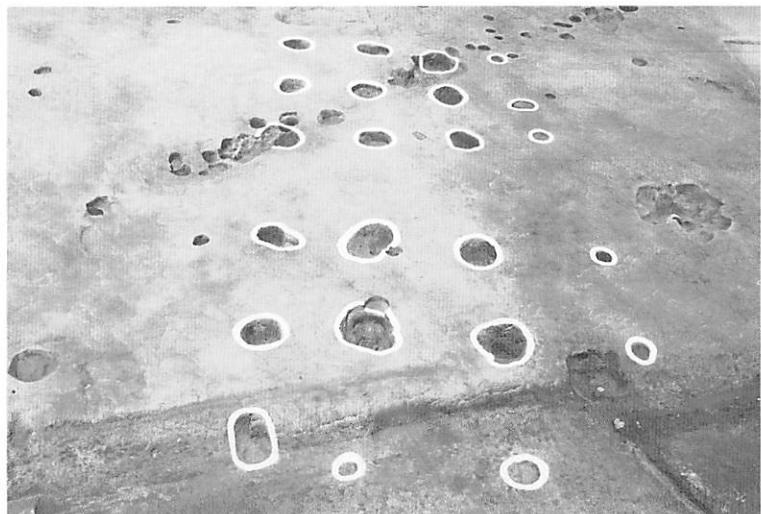
（北東から）



図版18

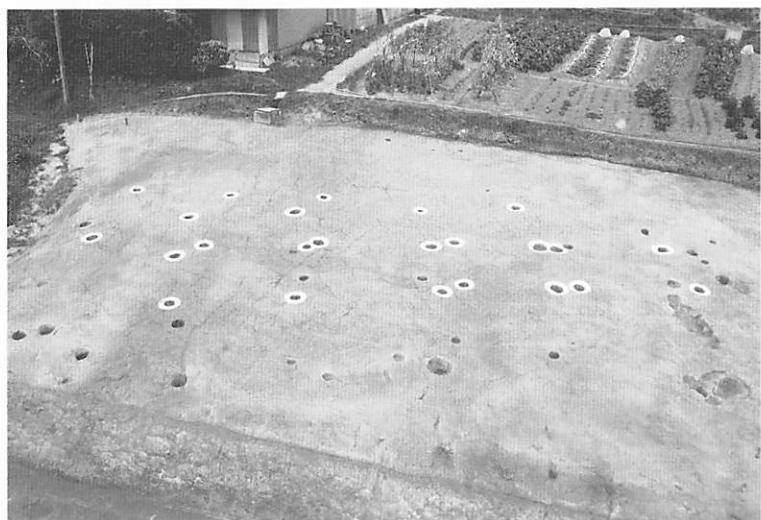
a SB 1・2 完掘状況

(東から)



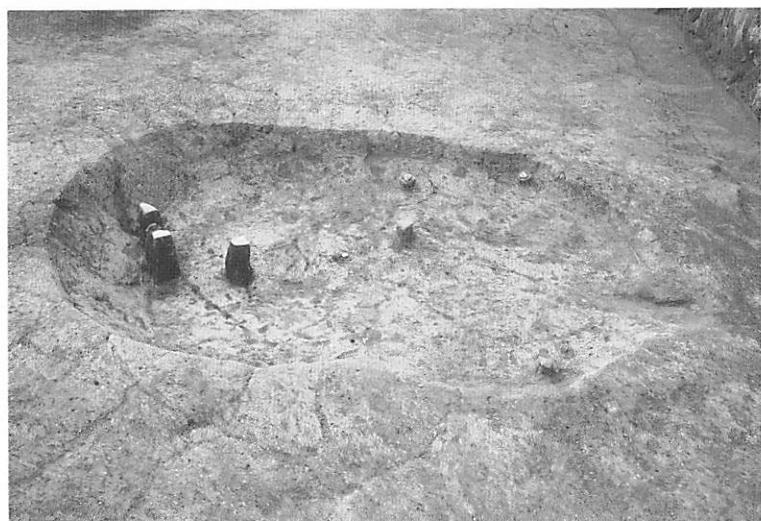
b SB 3～5 完掘

状況 (東から)



c SK 1 完掘状況

(南東から)



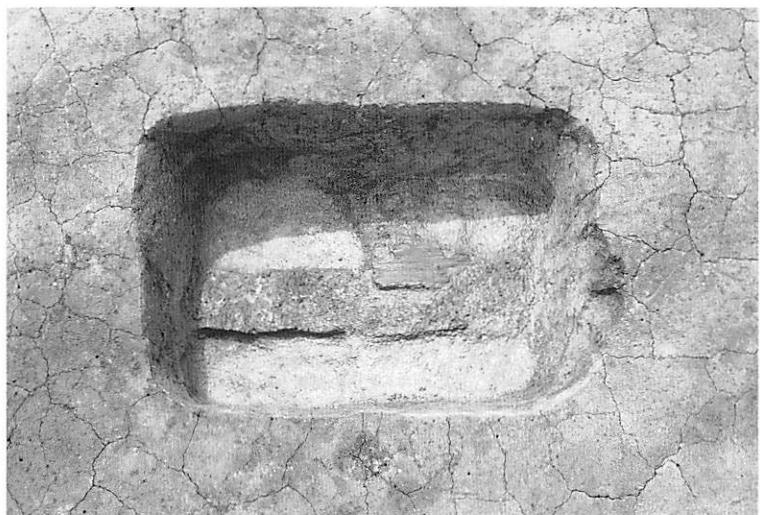
a SK 2 検出状況

(南東から)



b 木片出土状況

(南東から)



c 小柄・古銭出土

状況 (南西から)

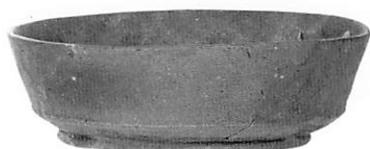




1



2



5



9



11



12

出土遺物

文献データシート

書名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第103集 高山1・2号遺跡		
執筆者	伊藤公一・松井和幸		
発行所	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター	発行年月日	1992年3月
遺跡名	高山1号遺跡：高山2号遺跡		
読み	こうやま		
所在地	広島県世羅郡甲山町大字別迫		
種別	集落・墓・散布地：集落・墓		
時代	縄文・弥生・中世：弥生・古代・中世		

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第103集

高山1・2号遺跡

発行日 平成4年(1992)年3月

編集・発行 財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733 広島市西区観音新町4丁目8-49

Tel (082) 295-5751

印刷所 産興株式会社